松山市文化財調査報告書122

市道北条鴻之坂線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

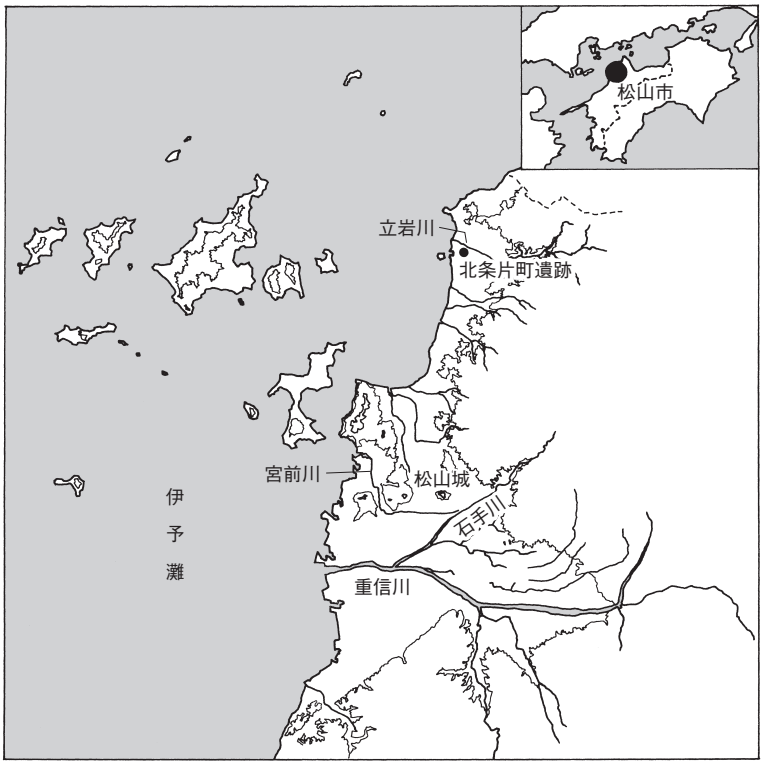
北条片町遺跡

2008

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

市道北条鴻之坂線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

北条片町遺跡



2008

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

1．斎灘から北条平野を望む（西より）

1．調査地から鹿島を望む（北より）

序

本書は、平成17年度に市道北条鴻之坂線の道路改良工事に伴って実施した北条片町遺跡の発掘調査報告書です。

本遺跡が所在する北条平野は、斎灘に面し南北に長く続く平野部と高縄山系を背後に控える丘陵部によって形成されております。この丘陵部を中心として主に弥生時代以降に多数の遺跡が存在することが知られています。特に中世においては地元の有力豪族であった河野氏が活躍した歴史の舞台ともなった地域でもあります。

今回報告する北条片町遺跡では、中世の集落跡を検出し、当時の生活用具が多数出土しました。こうした当平野部における発掘調査例はこれまで数少なく、貴重な資料を得ることができました。

本書の刊行にあたり、当遺跡の発掘調査についてご指導・ご協力を頂きました関係各位、ならびに関係機関に厚くお礼申し上げます。

本書が埋蔵文化財の調査・研究の一助となり、さらには文化財保護、生涯教育の向上に寄与できることを願っております。

平成20年３月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　　言

１．本書は、松山市北条において松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが実施した北条片町遺跡の発掘調査報告書である。

２．調査は、松山市都市整備部道路建設課により計画された市道北条鴻之坂線道路改良工事に伴う事前調査として2005（平成17）年８月１日から９月30日までの間に実施された。

３．遺構は呼称を略号で記述した。溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柱穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸである。

４．本書に表示した標高数値は海抜標高を示し、方位はすべて国土座標を基準とした真北である。

５．遺構の撮影は、山之内志郎及び大西朋子が行い、遺物の撮影・写真図版の作成は大西が行った。

６．巻頭図版１の航空写真は松山市総合政策部広報課より原板を借用した。

７．遺物の実測・製図、遺構図の製図は、岩本美保、木下奈緒美、田﨑真理、多知川富美子、村上真由美が行った。

８．縮尺は弥生土器と大型石製品が1/4、土師器と須恵器・陶磁器が1/3、土製品と鉄製品・小型石製品が1/2を基本とし、縮分値をスケール下に記した。

９．本調査における基準点測量は、㈱国際航業に業務委託した。

10．本書に関わる出土遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

11．本書の執筆及び編集は山之内が行い、田﨑の協力を得た。

製版　写真図版－175線
印刷　オフセット印刷
用紙　巻頭図版－マットコート76.5kg
本　　文－マットアート62.5kg
巻末図版－マットコート76.5kg
製本　アジロ綴じ

本　文　目　次

第１章　はじめに
１．調査に至る経緯…… 1
２．調査・刊行組織…… 1
３．立地と環境…… 2

第２章　試掘調査
１．経　緯…… 5
２．調　査…… 5
３．調査の結果…… 5

第３章　本格調査
１．経　緯…… 8
２．層　位…… 8
３．遺構と遺物……14

第４章　調査の成果と課題……37

挿　図　目　次

第１図　調査地周辺の遺跡分布図（縮尺　1/50,000）…… 3
第２図　トレンチ出土遺物実測図（縮尺　1/3）…… 5
第３図　トレンチ（Ｔ１～Ｔ11）配置図（縮尺　1/1,200）…… 6
第４図　トレンチ（Ｔ１～Ｔ11）柱状土層図（縮尺　1/40）…… 7
第５図　調査地位置図（縮尺　1/500）…… 9
第６図　遺構配置図（縮尺　1/150）……10
第７図　調査区北壁及び南壁土層図（縮尺　1/40）……11
第８図　調査区西壁土層図（縮尺　1/40）……12
第９図　調査区東壁土層図（縮尺　1/40）……13
第10図　ＳＫ１測量図、出土遺物実測図（縮尺　1/20・1/3）……15
第11図　ＳＫ３測量図、出土遺物実測図（縮尺　1/20・1/3・1/2）……15
第12図　ＳＫ５測量図、出土遺物実測図（縮尺　1/20・1/3・1/2）……16
第13図　ＳＫ２測量図（縮尺　1/20）……17
第14図　ＳＫ４測量図（縮尺　1/20）……17

第15図　ＳＫ６測量図（縮尺　1/20）……18
第16図　ＳＫ７測量図（縮尺　1/20）……18
第17図　ＳＤ１測量図（縮尺　1/20）……20
第18図　ＳＤ２測量図（縮尺　1/20）……21
第19図　ＳＤ３測量図（縮尺　1/40）……22
第20図　ＳＤ４測量図（縮尺　1/20）……23
第21図　ＳＤ５測量図（縮尺　1/20）……23
第22図　ＳＰ１・54・72測量図、出土遺物実測図（縮尺　1/10・1/4・1/3）……25
第23図　ＳＰ７・29・48測量図、出土遺物実測図（縮尺　1/10・1/3・1/2）……26
第24図　ＳＸ１測量図（縮尺　1/20）……27
第25図　ＳＸ２測量図（縮尺　1/20）……27
第26図　ＳＸ３測量図（縮尺　1/20）……28
第27図　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図⑴（縮尺　1/4・1/3）……29
第28図　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図⑵（縮尺　1/3）……30
第29図　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図⑶（縮尺　1/3）……31
第30図　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図⑷（縮尺　1/3・1/2）……32
第31図　第Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺　1/3）……32
第32図　第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺　1/3）……32
第33図　西壁トレンチ出土遺物及び表採遺物実測図（縮尺　1/4・1/3）……33

表　目　次

表１　土坑一覧……33
表２　溝一覧……34
表３　試掘トレンチ出土遺物観察表　土製品……34
表４　ＳＫ出土遺物観察表　土製品……34
表５　ＳＫ出土遺物観察表　鉄製品……34
表６　ＳＰ出土遺物観察表　土製品……34
表７　ＳＰ出土遺物観察表　石製品……35
表８　第Ⅰ～Ⅳ層出土遺物観察表　土製品……35
表９　西壁トレンチ出土遺物及び表採遺物観察表　土製品……37
表10　西壁トレンチ出土遺物観察表　石製品……37

写真図版目次

巻頭図版１　１．斎灘から北条平野を望む（西より）
巻頭図版２　１．調査地から鹿島を望む（北より）

図版１　１．Ｔ１調査前風景（北東より）
　　２．Ｔ１土層堆積状況(1)（東より）
　　３．Ｔ１土層堆積状況(2)（東より）
図版２　１．Ｔ２作業風景（北東より）
　　２．Ｔ２土層堆積状況(1)（北東より）
　　３．Ｔ２土層堆積状況(2)（東より）
図版３　１．Ｔ３掘削状況（東より）
　　２．Ｔ３土層堆積状況(1)（北東より）
　　３．Ｔ３土層堆積状況(2)（東より）
図版４　１．Ｔ４調査前風景（北東より）
　　２．Ｔ４土層堆積状況(1)（北より）
　　３．Ｔ４土層堆積状況(2)（北西より）
図版５　１．Ｔ５調査前風景（南より）
　　２．Ｔ５掘削風景（北より）
　　３．Ｔ５土層堆積状況（東より）
図版６　１．Ｔ６調査前風景（南西より）
　　２．Ｔ６土層堆積状況(1)（南西より）
　　３．Ｔ６土層堆積状況(2)（西より）
図版７　１．Ｔ７掘削風景（南西より）
　　２．Ｔ７土層堆積状況(1)（南西より）
　　３．Ｔ７土層堆積状況(2)（西より）
図版８　１．Ｔ８調査風景（南東より）
　　２．Ｔ８土層堆積状況(1)（南西より）
　　３．Ｔ８土層堆積状況(2)（西より）
図版９　１．Ｔ９調査前風景（北西より）
　　２．Ｔ９土層堆積状況(1)（北西より）
　　３．Ｔ９土層堆積状況(2)（西より）
図版10　１．Ｔ10掘削風景（北西より）
　　２．Ｔ10土層堆積状況(1)（南西より）
　　３．Ｔ10土層堆積状況(2)（西より）
図版11　１．Ｔ11調査前風景（北西より）
　　２．Ｔ11土層堆積状況(1)（北西より）
　　３．Ｔ11土層堆積状況(2)（西より）

図版12　１．調査前風景（北より）
　　２．１区掘削風景（北より）
図版13　１．１区遺構検出状況（北より）
　　２．１区遺構検出状況（西より）
図版14　１．ＳＫ１土層堆積状況（西より）
　　２．ＳＫ１完掘状況（南より）
図版15　１．ＳＰ７遺物出土状況（北より）
　　２．１区作業風景（南より）
図版16　１．１区完掘状況（北より）
　　２．１区完掘状況（南より）
図版17　１．２区掘削風景（南より）
　　２．２区遺構検出状況（北西より）
図版18　１．ＳＫ５土層堆積状況（南より）
　　２．ＳＫ５完掘状況（南より）
図版19　１．ＳＰ72遺物出土状況（北より）
　　２．２区作業風景（北西より）
図版20　１．２区完掘状況（北より）
　　２．２区完掘状況（南より）
図版21　１．ＳＫ３出土遺物、ＳＫ５出土遺物、ＳＰ７出土遺物、ＳＰ72出土遺物、西壁トレンチ出土遺物、第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物、試掘トレンチ出土遺物

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯

2005（平成17）年４月、松山市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）より松山市北条560番１の一部　外における市道北条鴻之坂線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。旧北条市域では、これまでに丘陵部を中心に縄文時代から中世にかけての遺跡が存在していることが発掘調査によって明らかになっているが、平野部では一部において確認されているに過ぎない。

そこで申請地における埋蔵文化財の有無を確認する必要があるため、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、センター）は試掘調査を平成17年６月13・14日（月・火）及び18年10月23・24日（月・火）に実施した。

試掘調査では、Ｔ１～11の11本のトレンチを設定し、13層の土層を確認した（第３・４図）。Ｔ１～４・６～11では遺構・遺物ともに確認することができなかったが、Ｔ５では、土坑・溝・柱穴を検出し、中世の土師器や須恵器の破片が出土した（第２図）。

この結果を受け道路建設課と文化財課の両者は、遺跡の取り扱いについて協議を重ね、工事に伴って消失する遺跡に対しＴ５を設定した地番において記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、中世の集落構造の解明を主目的とし、文化財課の指導のもとセンターが主体となり17年８月１日より本格調査を実施した。

２．調査・刊行組織（平成19年４月１日現在）

調査地番　松山市北条560番１の一部
調査期間　2005（平成17）年８月１日㈪～９月30日㈮
調査面積　317.83㎡

松山市教育委員会	教育長	土居　貴美
事務局	局長	石丸　修
	企画官	仙波　和典
	企画官	田中　郁夫
	企画官	田浦　雅文
文化財課	課長	家久　則雄
	主幹	森川　恵克
	主査	栗田　正芳
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	吉岡　一雄
埋蔵文化財センター	所長	丹生谷博一
	次長兼教育普及担当リーダー	重松　幹雄
	次長兼調査担当リーダー	田城　武志
	調査担当	相原　浩二・山之内志郎・大西　朋子

３．立地と環境

（１）地理的環境

本遺跡が所在する北条平野は、瀬戸内海に突出する高縄半島の西縁部に位置する。この平野は、高縄山系に水源を持つ立岩川や河野川・高山川・粟井川の浸食・堆積作用によって形成された扇状地が接合し形成された南北に長く延びる沖積平野である。その東には標高986mの高縄山をはじめとする高縄山系が広がりをみせており、西は斎灘に面し、その奥には防予諸島を望むことができる。行政上は平成17年１月の「平成の大合併」により、北条市から松山市に編入し、北・東部を今治市と接している。

本遺跡は斎灘に流れ込む立岩川の南側に位置し、その氾濫原に遺跡は展開しており、本格調査前に実施した試掘調査においても立岩川の堆積によると考えられる土層が確認されている。

（２）歴史的環境

旧石器時代

遺物は龍徳寺山からナイフ形石器が、和田池で角錐状石器が採集されているほか、安養寺谷（辻新池）の池床で緑色硅岩製の細石核・石刃などが出土している。なお、同時代の遺構は現在のところ確認されていない。

縄文時代

遺物は、前田池で後期の六軒家Ⅰ式、小松川式土器が採集されているほか、晩期Ⅱ期の土器も出土している。そのほか後期の土器が採集された遺跡としてマス池・サオ池・河原池・阿部ヶ谷池・俵原池遺跡がある。また小山田遺跡では後期初頭と考えられる疑似縄文を施した深鉢が出土している。また別府遺跡２区では自然流路内で土器・石器が出土している。このように平野縁辺の低丘陵周辺で遺物が採集されているのみで、遺構は確認されていない。

弥生時代

前期は高山遺跡で土器が採集されている。また南宮ノ戸貝塚では石鏃・石匙・貝製垂飾品などが出土している。また片山遺跡では前期末の集落を区画する溝や貯蔵穴から多量の土器や石器が出土している。このように立岩川左右岸における独立丘陵上において遺跡が点在している。

中期になると遺跡数は増加し、恵良山南東麓に稗佐古・女夫池・菖蒲谷・西ヶ谷遺跡などの高地性集落が数多く確認されている。この時期に低地より丘陵頂部に集落を形成する点は特徴といえる。中尾山遺跡２次調査では、祭祀行為に使用されたと推定される焼成後穿孔の完形土器が数多く出土しており、注目される。

後期には、椋の原清水遺跡では製塩土器が出土している。その他、老僧奥・夏狩・柳が内遺跡などが存在している。大相院遺跡５～９区では後期後半～古墳時代初頭にかけての遺構から讃岐系や山陰系などの外来系土器が数多く出土している。

古墳時代

集落では、高山川の河岸段丘上で北条常保免遺跡で４世紀以降の竪穴式住居跡４棟を検出していることから、当該期の集落が継続して営まれていたことが明らかとなった。この遺跡においても讃岐系や山陰系などの外来系土器が出土している。

前期古墳では、立岩川周辺に櫛玉比売命神社古墳（全長75m）や国津比古命神社古墳（全長50m）

★北条片町遺跡　①和田池遺跡　②安養寺谷(辻新池)遺跡　③前田池遺跡　④マス池遺跡　⑤サオ池遺跡　⑥河原池遺跡　⑦阿部ヶ谷池遺跡
⑧俵原池遺跡　⑨小山田遺跡　⑩別府遺跡　⑪高山遺跡　⑫南宮ノ戸貝塚　⑬片山遺跡　⑭稗佐古遺跡　⑮女夫池遺跡　⑯菖蒲谷遺跡
⑰西ヶ谷遺跡　⑱中尾山遺跡　⑲椋の原清水遺跡　⑳老僧奥遺跡　㉑夏狩遺跡　㉒柳が内遺跡　㉓大相院遺跡　㉔北条常保免遺跡
㉕櫛玉比売命神社古墳　㉖国津比古命神社　㉗小竹古墳　㉘名石古墳　㉙若宮古墳　㉚高山古墳　㉛上灘波南古墳群　㉜新城古墳群
㉝上灘波古墳群　㉞小山田古墳群　㉟奥の谷古墳　㊱龍徳寺山古墳群　㊲夏目古墳群　㊳常竹大谷古墳群　㊴センボ山古墳群　㊵薬師堂

第１図　調査地周辺の遺跡分布図

の前方後円墳が隣接して築造される。いずれも自然地形を利用して築造されており、墳丘には葺石を葺いており、円筒埴輪片が採集されている。また中期には北条平野から北東に山を越えた浅海地区において、小竹古墳・名石古墳・若宮古墳・高山古墳などの箱式石棺を主体部とする古墳が数多く確認されている。上難波南古墳群は横穴式石室・竪穴式石室・箱式石棺・木棺などを内部主体にもつ10基余りの古墳群で、中期以降に長期間にわたり築造されていたことが発掘調査によって明らかとなっている。

旧北条市域には300基以上の古墳が存在しているといわれているが、そのほとんどが新城古墳群・上難波古墳群･小山田古墳群などの横穴式石室を主体部にもつ小規模の後期古墳である。その一方で、奥の谷古墳のような大型の石材を石室に用いる県下最大級の横穴式石室を有する古墳もある。こうした古墳には畿内型横穴式石室の形態が影響していると考えられる。これらの北部地域以外でも龍徳寺山古墳群・夏目古墳群などの中部地域、常竹大谷古墳群・センボ山古墳群などの南部地域でも古墳の存在が知られている。特に龍徳寺山１号墳は玄室が前・後室の二室に分かれる特異な形態をもつ横穴式石室を主体部としており、注目される。

古代

奈良・平安時代の遺跡は数多くなく、別府遺跡１区では掘立柱建物跡や土坑を検出しており、古代に位置付けられる遺構と考えられる。大相院遺跡10区ではＳＸ内から古代の須恵器や円面硯が出土していることから、周辺地域に識字階級が存在した可能性が考えられる。その他、上難波庄部落に所在する薬師堂には奈良時代後半から平安時代初期と考えられる木心乾漆菩薩立像をはじめ、10～11世紀代の仏像が30体も安置されていることから、周辺に古代寺院が存在したことが考えられる。

中世

河野氏は風早郡河野郷の有力豪族で、13世紀以降にこの地域を拠点に台頭してきたが、その拠点を松山市道後の湯築城に移した後も隆盛を極めたことから、高縄山の西部山麓を中心に河野氏関連の中世山城が平野を取り囲むように存在している。これらの実態や築城時期については正式な発掘調査が行われていないために不明な点が多く、また旧来の根拠地である土居館は河野通盛が京都の東福寺に模して改築して善応寺としたが、現在のところ、その場所や寺域等を確認することはできていない。また大相院遺跡７区では、土坑から風字硯・短刀・龍泉窯系劃花文青磁碗が出土していることから、識字階級の墓と考えられる。

【参考文献】

阪本安光　『北条市上難波南古墳群調査報告書』1982　愛媛県教育委員会
中野良一ほか　『小山田Ⅱ遺跡　小山田支群』1990　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
長井数秋　『奥ノ谷山・西ヶ谷山遺跡群』1992　北条市教育委員会
大北冬彦ほか　『片山遺跡　片山１号墳』1999　北条市教育委員会
土井光一郎　『中尾山遺跡１次・２次』2003　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
大北冬彦ほか　『北条常保免遺跡』2004　北条市教育委員会
三好裕之ほか　『善応寺畦地遺跡　大相院遺跡　別府遺跡』2004　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

第２章　試掘調査

１．経　緯

センターは申請地における試掘調査を2005（平成17）年６月13・14日（月・火）及び18年10月23・24日（月・火）の２度にわたり実施した。試掘調査は、それぞれＴ１～５、Ｔ６～11の計11本のトレンチを設定し（第３図）、遺構と遺物、包含層の有無を確認した。

２．調　査

平成17年６月13日㈪、センター（担当調査員吉岡和哉）は調査区を設定し、Ｔ１～５の５本のトレンチにおいて順次調査を行う（図版１～５）。調査ではまず重機による掘り下げを行い、平面で遺構や遺物を検出しながら進める。その後、土層の分層を行い、土層を記録し、遺構・遺物検出時には平板測量をし､その位置を記録する。またトレンチの位置図を作成し､最後には清掃し現状復帰をして、ひとつのトレンチ調査を終える。写真撮影は各工程で適時行う。各トレンチでこの工程を進め、翌14日㈫に第１回の試掘調査を終了する。

次に平成18年10月23日㈪、センター（担当調査員相原秀仁）は調査区を設定し、Ｔ６～11の６本のトレンチにおいて順次調査を行う（図版６～11）。調査ではまず重機による掘り下げを行い、平面で遺構や遺物を検出しながら進める。その後、土層の分層を行い、土層を記録する。またトレンチの位置図を作成し、最後には清掃し現状復帰をして、ひとつのトレンチ調査を終える。写真撮影は各工程で適時行う。各トレンチでこの工程を進め、翌24日㈫に第２回の試掘調査を終了する。

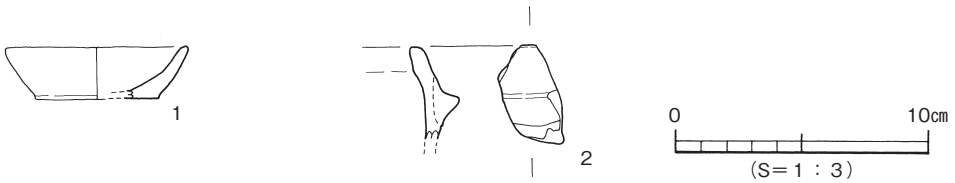
３．調査の結果

試掘調査の結果、13層の土層を確認した（第４図）。Ｔ１～４・６～11では遺構・遺物ともに確認することができなかったが、Ｔ５では土坑・溝・柱穴を検出し、中世の土師器や須恵器の破片が出土した。したがって、同トレンチが所在する水田を本格調査の対象地とした。

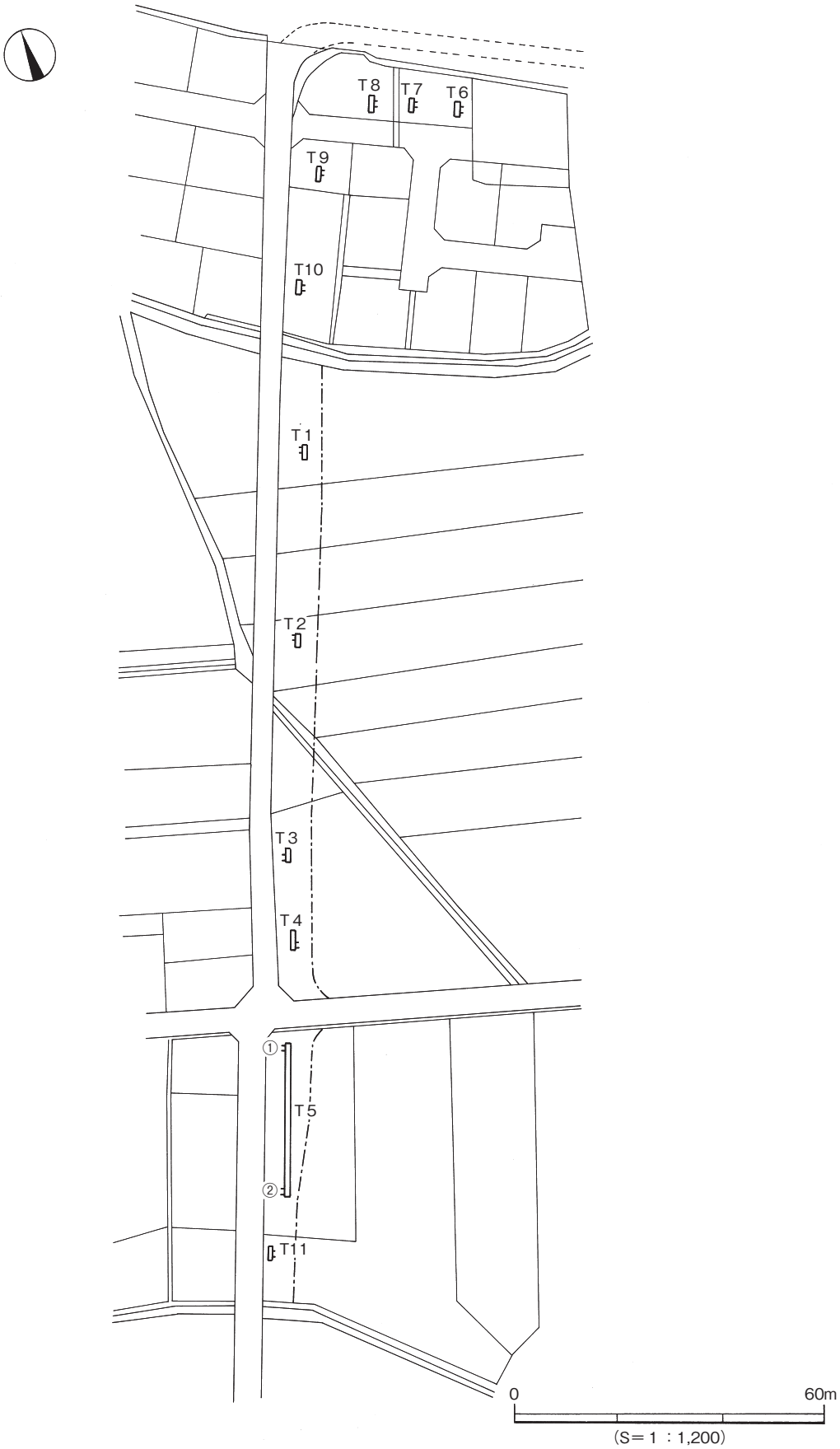
Ｔ５において出土した遺物のうち、図化可能なものを下記に報告する。

出土遺物（第２図、図版21）

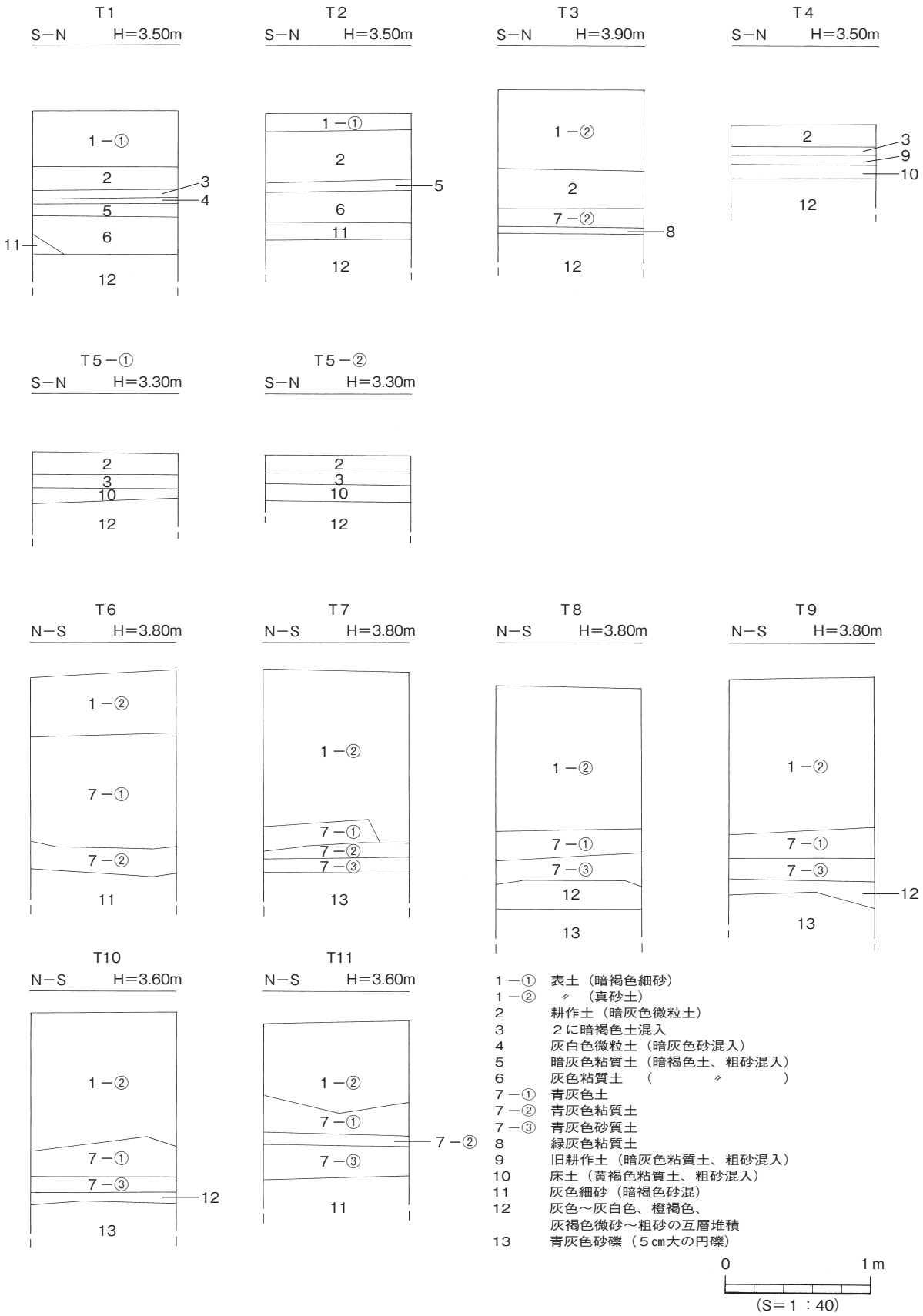
１は土師器皿である。底部の切り離しは回転糸切りである。２は土釜である。口縁端部から下がった位置に断面三角形のタガが貼り付けられる。外面には煤が付着する。



第２図　トレンチ出土遺物実測図



第３図　トレンチ（Ｔ１～Ｔ11）配置図



第４図　トレンチ（Ｔ１〜Ｔ11）柱状土層図

第３章　本格調査

１．経　緯

調査は８月１日から９月30日までの２か月間、屋外調査を行った。その際、廃土置場の都合により調査地北半部を１区として前半期、南半部を２区として後半期に調査を行った（第５図）。

調査の手順は両調査区とも同様で、調査区内の耕作土を重機にて除去し、東壁・西壁に沿い南北方向にトレンチを掘削して堆積土層を確認し、地山上面まで表土層を除去した。以降、順次人力で遺構の検出を行い、遺物の取り上げを行うとともに平・断面図の作成や写真撮影を同時進行で実施した。

調査にあたっては、世界測地系の基準点を４ｍメッシュでグリッドを設置し調査地の区割りを行った。以下、調査工程を略記する。

８月１日、重機により１区の表土掘削作業を開始する。同時に東・西・南壁下に排水用のトレンチを設定する。11・12日、遺構検出作業を行うと同時に遺構平面図を作成する。13日、基準杭を打設する。17日、検出遺構の写真撮影を行う。18～22日、遺構配置図を作成後、各遺構の掘り下げを行う。22日、各遺構の平板測量を行う。23日、東・西・北壁土層図及びコンタ図を作成する。24日、１区の調査を完了する。29・30日、重機を再投入し、２区の表土掘削作業を行う。同時に東・西・北壁下に排水用のトレンチを設定する。

９月２日、２区の遺構検出作業を行う。７日、遺構配置図を作成する。８日、検出遺構の写真撮影を行い、基準杭を打設する。９～13日、各遺構の掘り下げを行い、同時進行で平板測量を行う。13日、東・西・南壁土層図を作成する。27日、コンタ図を作成し、２区の調査を完了する。28日、全ての屋外調査を完了し、重機により２区を埋め戻す。29日、出土遺物の整理を行うとともに、調査用具等を撤去する。30日、現場事務所を撤去し、屋外調査を終了する。

２．層　位

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層灰色土（耕作土）、第Ⅱ層橙色土（床土）、第Ⅲ層灰白色土（旧耕作土）、第Ⅳ層灰橙色土、第Ⅴ層黄灰色土、第Ⅵ層橙色砂質土（地山）、第Ⅶ層灰色砂質土（地山）である（第７～９図）。

遺構は、第Ⅳ層上面及び第Ⅵ層上面で検出した。

第Ⅰ層－水田の耕作土で、厚さ５～25cmを測る。調査区全域に広く堆積する。

第Ⅱ層－水田の床土で、厚さ３～７cmを測る。調査区全域に広く堆積する。部分的に第Ⅰ層との間に厚さ４cm程度の灰橙色土が堆積している。

第Ⅲ層－旧耕作土で、厚さ２～６cmを測る。調査区北側にのみ部分的に堆積する。

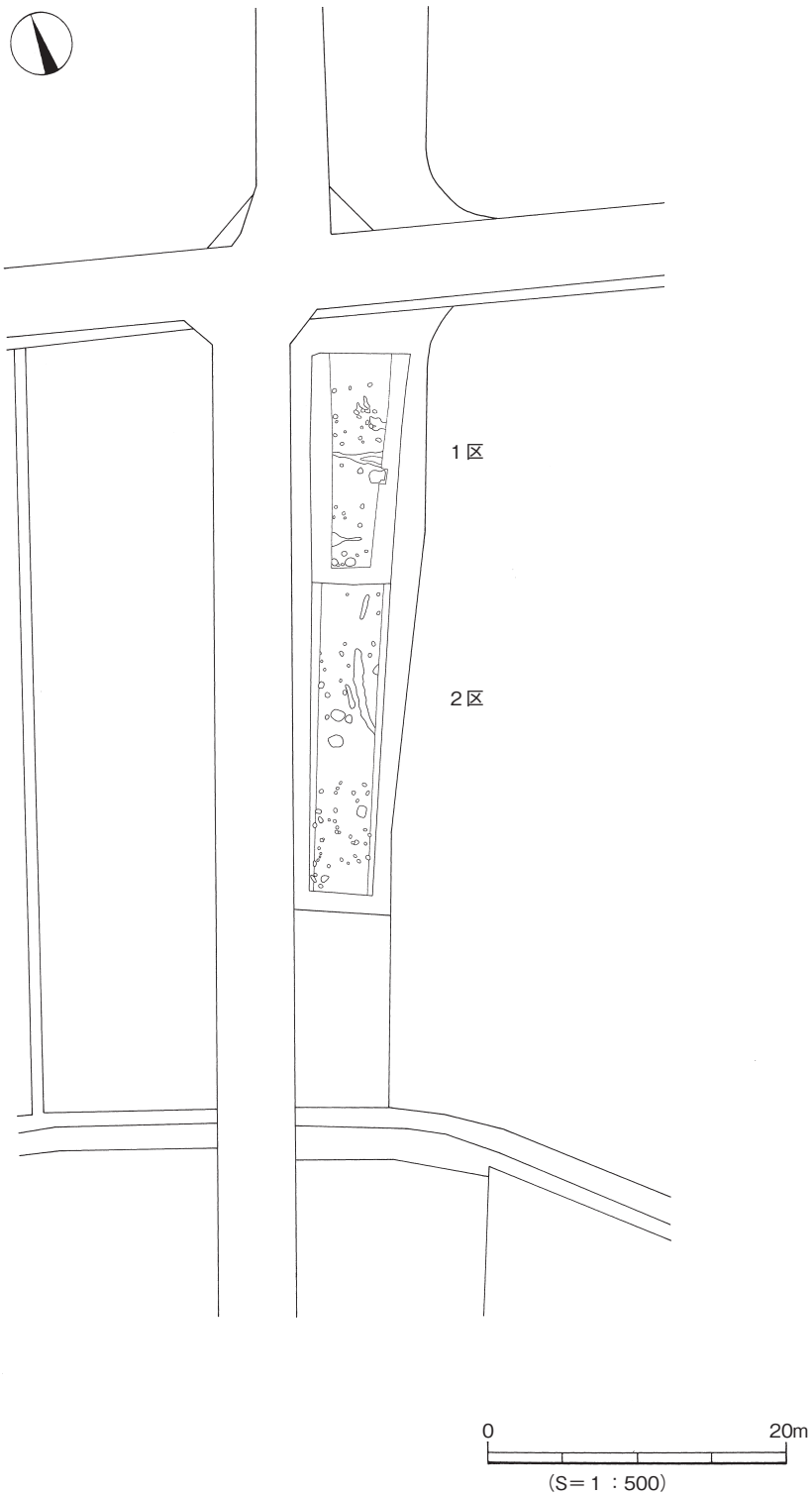
第Ⅳ層－灰橙色土で、厚さ４～14cmを測る。調査区全域に広く堆積する。南壁付近では上面の高さをそろえるためか、第Ⅴ層上に薄く堆積している。

第Ⅴ層－黄灰色土で南壁付近にのみ堆積する。厚さ12～16cmを測る。

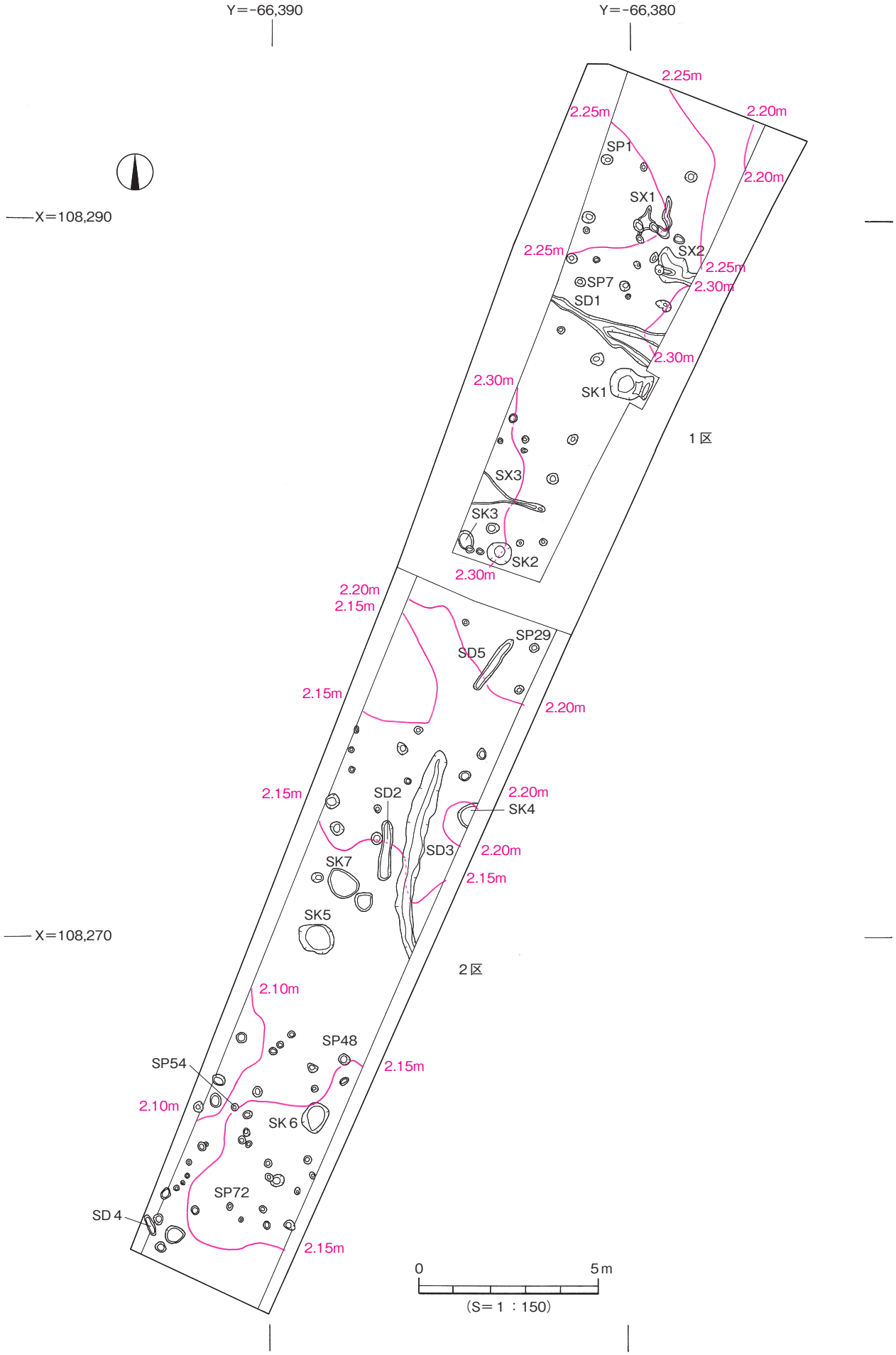
第Ⅵ層－この層以下は地山で、橙色砂質土である。厚さ２～15cmを測る。調査区ほぼ全域に堆積し

ている。

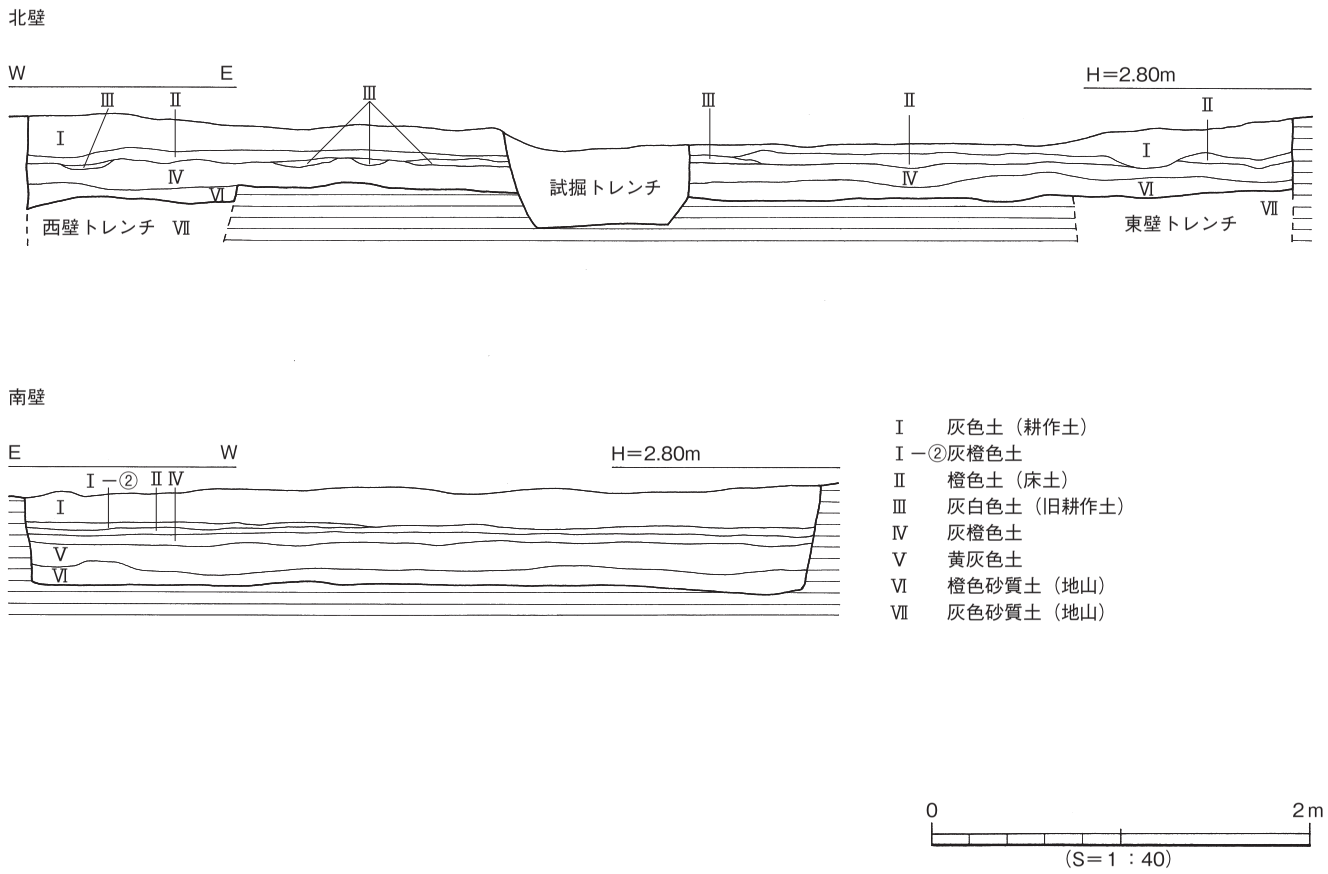
第Ⅶ層－灰色砂質土で、地山である。調査区全域に堆積している。



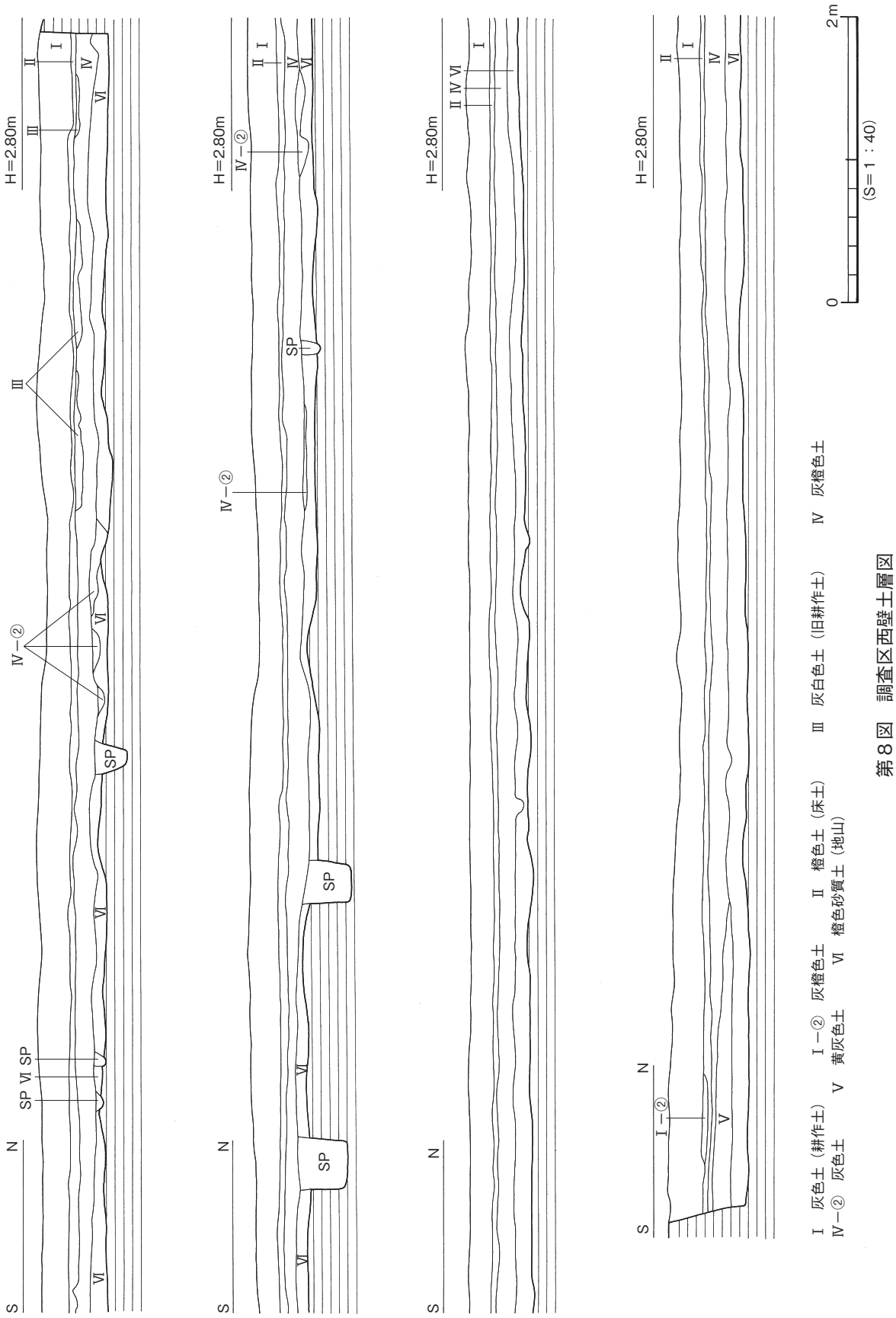
第５図　調査地位置図


Y=-66,390
Y=-66,380
X=108,290
X=108,270
2.25m
2.20m
SP1
SX1
SX2
SP7
SD1
2.30m
SK1
1 区
SX3
SK3
SK2
2.15m
SP29
SD5
SD2
SK4
SD3
SK7
SK5
2 区
2.10m
SP48
SP54
SK 6
SP72
SD 4
0
5 m
(S= 1 : 150)

第６図　遺構配置図

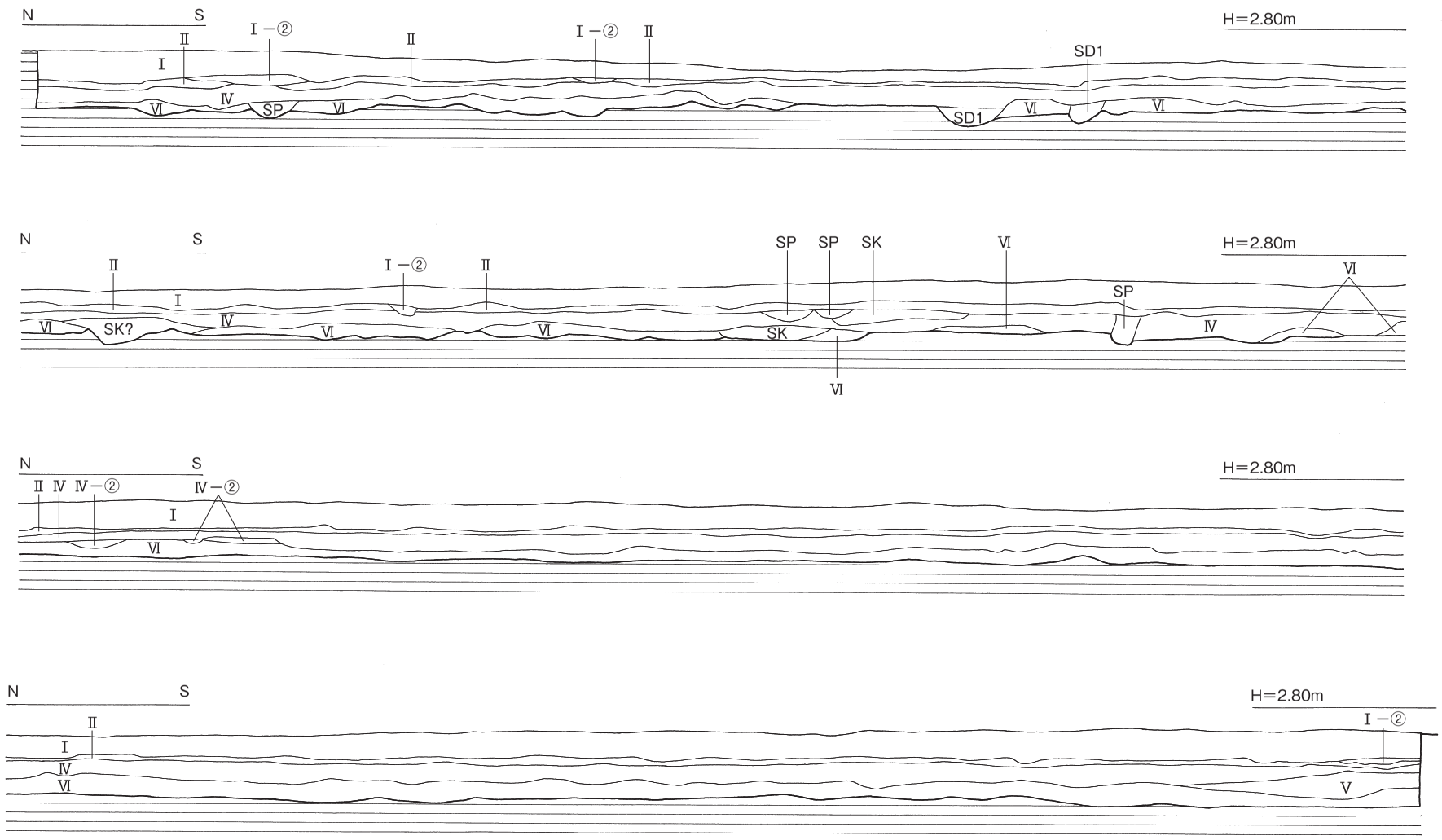


第７図　調査区北壁及び南壁土層図



Ⅰ　灰色土（耕作土）　Ⅰ－②　灰橙色土　Ⅱ　橙色土（床土）　Ⅲ　灰白色土（旧耕作土）　Ⅳ　灰橙色土
Ⅳ－②　灰色土　Ⅴ　黄灰色土　Ⅵ　橙色砂質土（地山）

第８図　調査区西壁土層図



Ⅰ　灰色土（耕作土）　　Ⅰ－②　灰橙色土　　Ⅱ　橙色土（床土）　　Ⅳ　灰橙色土　　Ⅳ－②　灰色土
Ⅴ　黄灰色土　　Ⅵ　橙色砂質土（地山）

0　2m
（S＝1：40）

第９図　調査区東壁土層図

3. 遺構と遺物

検出した遺構は、土坑（ＳＫ）７基、溝（ＳＤ）５条、柱穴（ＳＰ）87基、性格不明遺構（ＳＸ）３基である（第６図）。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、石製品、鉄製品などである。以下、主な遺構と遺物を記述する。

（１）土坑（ＳＫ）

土坑はＳＫ１～７の７基を検出した。ＳＫ１～３が１区、ＳＫ４～７が２区である。

ＳＫ１（第10図、図版14）

１区中央付近に位置する。平面形態は不整形を呈し、断面形態は長軸方向で二段の逆台形状を呈する。規模は長軸1.1m、短軸0.83m、深さ16cmを測る。埋土は３層に分かれ、第１層灰色砂質土、第２層褐色土、第３層炭混じりの灰褐色土である。第３層より土師器片が数点出土しているが、実測可能なものは１点である。

出土遺物（第10図）

３は土師器皿である。口縁端部はやや厚く、丸くおさめている。

時期：出土遺物から13世紀代と考えられる。

ＳＫ３（第11図）

１区南端に位置し、ＳＰ21により南部を切られている。平面形態は楕円形を呈し、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸約0.55m、短軸0.4m、深さ11cmを測る。埋土は灰色土の単一層である。土坑内より土師器片と陶器片・土錘が出土しているが、実測可能なものは陶器片と土錘である。

出土遺物（第11図、図版21）

４は坏の底部片である。５は管状土錘で、重さは4.38ｇを測る。

時期：出土遺物から中世と考えられる。

ＳＫ５（第12図、図版18）

２区中央に位置する。平面形態は不整形を呈し、断面形態は舟底状を呈する。規模は長軸1.05m、短軸0.82m、深さ11cmを測る。埋土は２層に分かれ、第1層炭混じりの灰褐色土、第２層黄灰色粘質土である。第１層より土師器皿・鉄釘が出土している。

出土遺物（第12図、図版21）

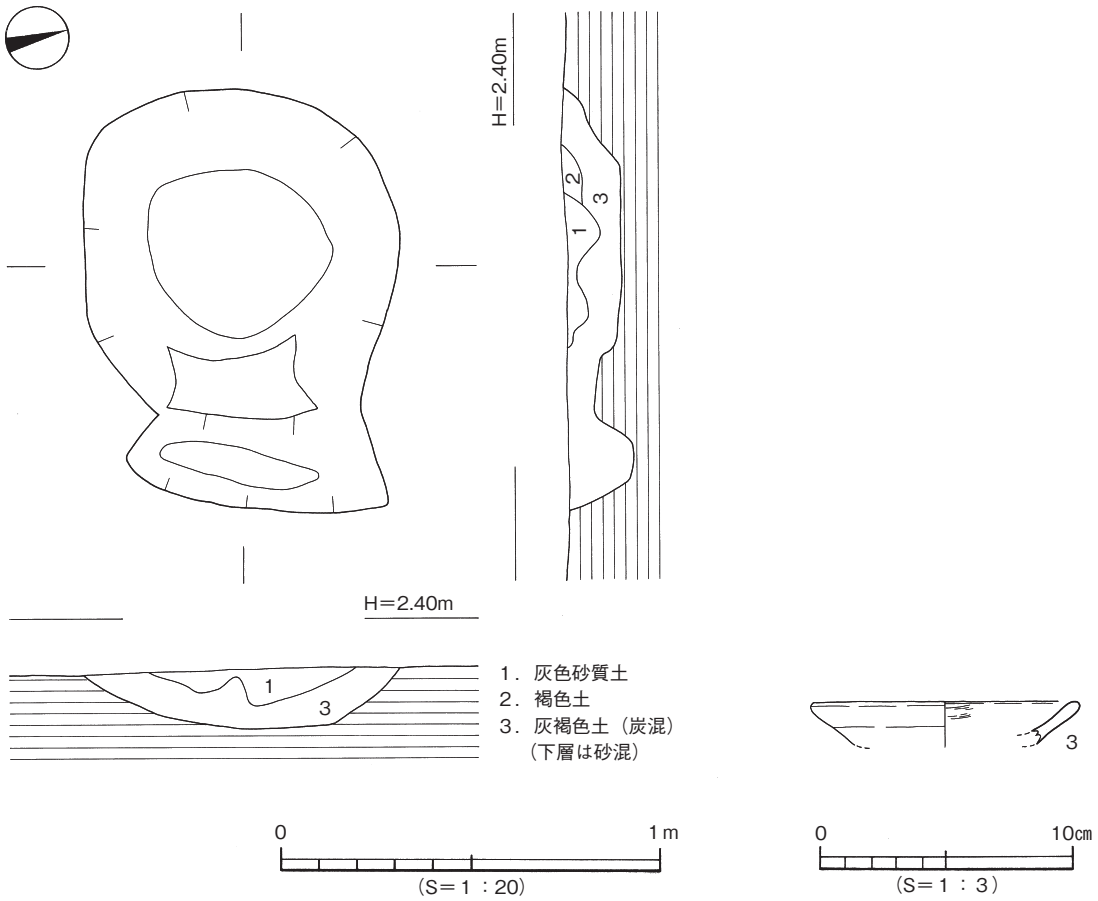
６は平底と思われる土師器皿である。７は鉄釘である。釘頭部には切断痕跡が残る。

時期：土師器皿の全体像が不明なため、遺物による時期決定は困難であるが、埋土第１層がＳＫ１第３層と同じであるため、13世紀代と考えられる。

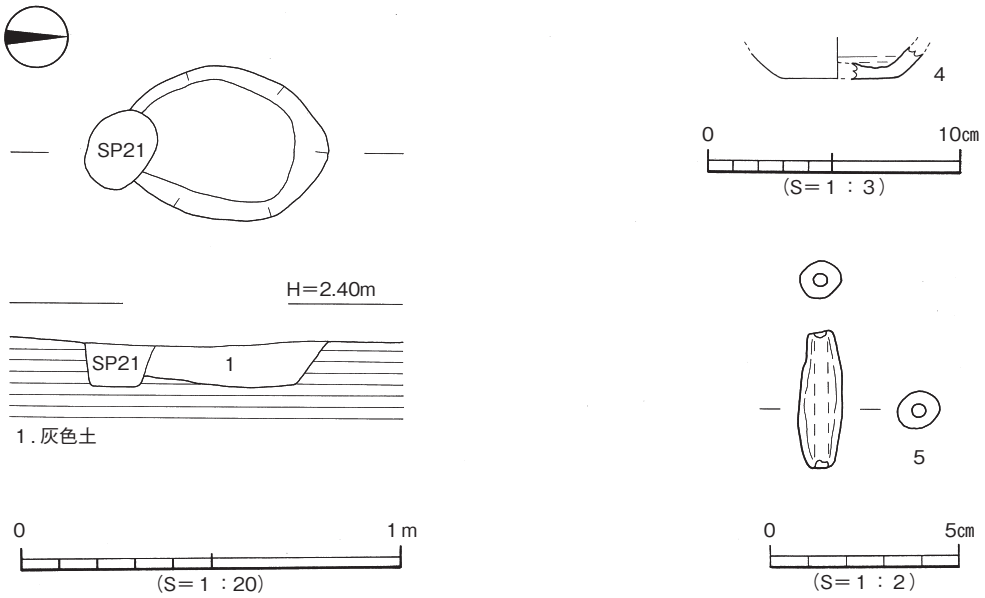
ＳＫ２（第13図）

１区南端に位置する。平面形態は楕円形を呈し、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸0.67m、短軸0.6m、深さ21cmを測る。埋土は灰色土の単一層である。土坑内より土師器片が数点出土しているが、小片のため図示できなかった。

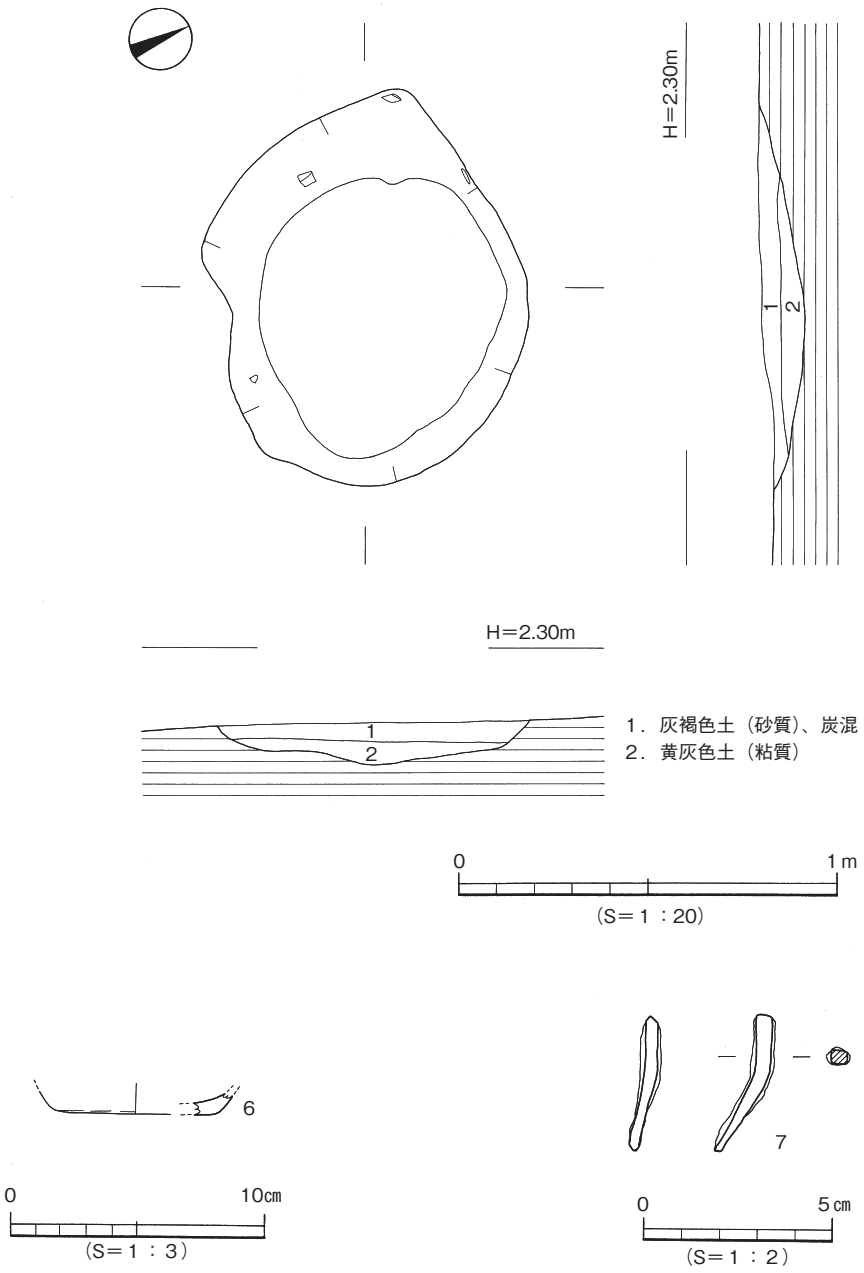
時期：遺構埋土がＳＫ３と同埋土のため中世と考えられる。



第10図　ＳＫ１測量図、出土遺物実測図



第11図　ＳＫ３測量図、出土遺物実測図



第12図　ＳＫ５測量図、出土遺物実測図

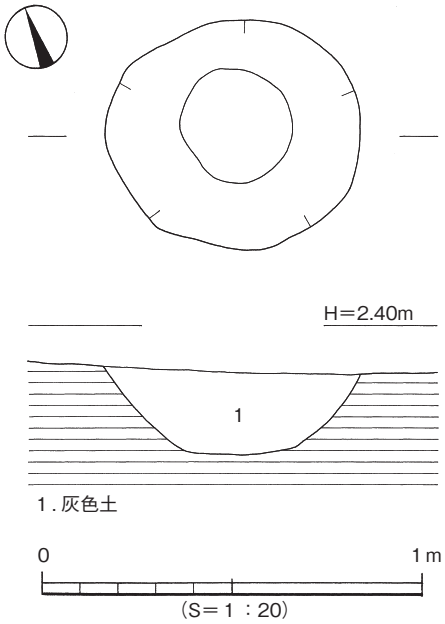
ＳＫ４（第14図）

２区北寄りに位置し、東半部を東壁トレンチに切られている。平面形態は楕円形と推定され、断面形態は皿状を呈する。規模は残存長軸0.71m、短軸0.35m、深さ４cmを測る。埋土は灰褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

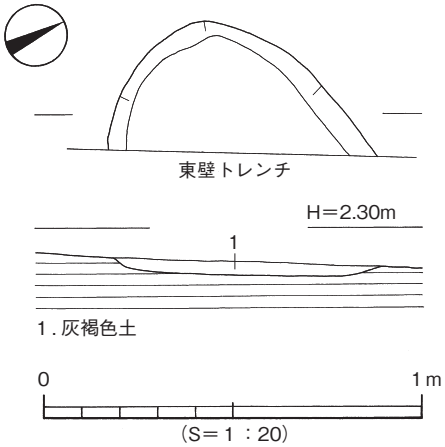
時期：遺構埋土がＳＫ１第３層と同埋土のため13世紀代と考えられる。

ＳＫ６（第15図）

２区南寄りに位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸0.81m、短軸0.6m、深さ29cmを測る。埋土は２層に分かれ、第１層やや粘質の灰色土、第２層粗砂を



第13図　ＳＫ２測量図



第14図　ＳＫ４測量図

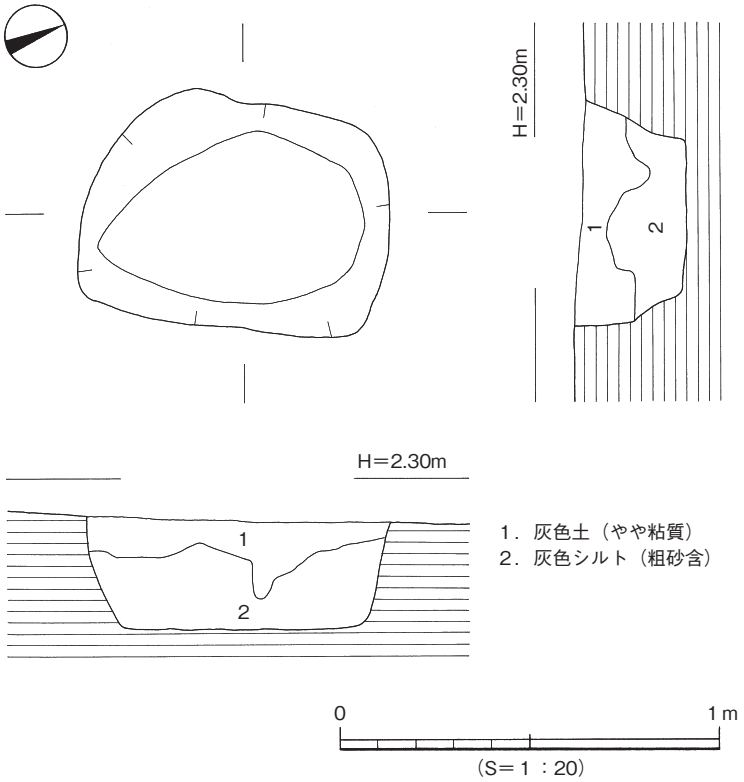
含む灰色土である。土坑内より土師器片が出土しているが、小片のため図示できなかった。

時期：埋土第１層がＳＫ３と同埋土のため中世と考えられる。

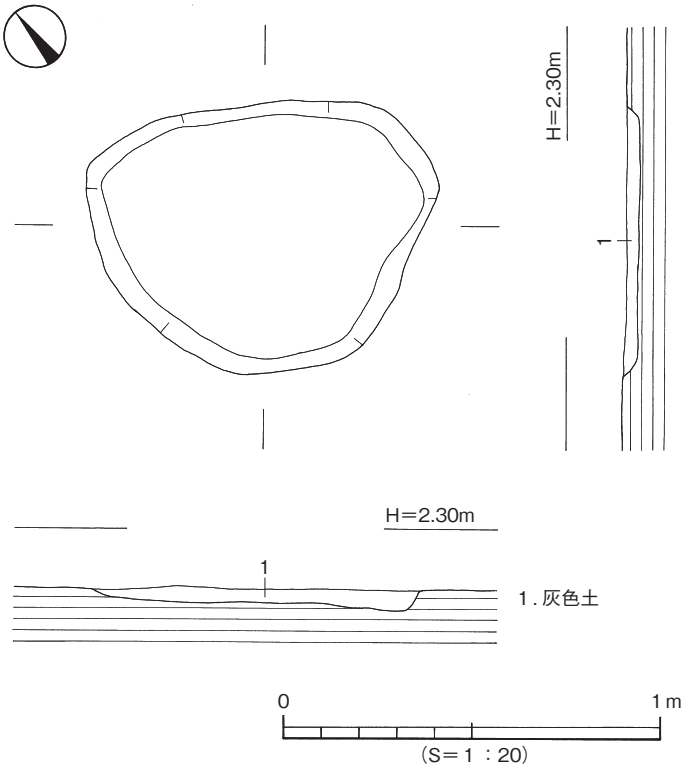
ＳＫ７（第16図）

２区ほぼ中央に位置する。平面形態は楕円形を呈し、断面形態は皿状を呈する。規模は長軸0.93m、短軸0.71m、深さ４㎝を測る。埋土は灰色土の単一層である。土坑内より土師器片が出土しているが、小片のため図示できなかった。

時期：遺構埋土がＳＫ３と同埋土のため中世と考えられる。



第15図　ＳＫ６測量図



第16図　ＳＫ７測量図

（２）溝（ＳＤ）

溝はＳＤ１～５の５条を検出した。ＳＤ１が１区、ＳＤ２～５が２区である。

ＳＤ1（第17図）

１区中央に位置し、東西方向に伸び、中央付近で二股に分かれて両壁にまたがっている。規模は検出長3.20m、上場幅0.15～0.28m、深さ２～６㎝を測り、東西とも調査区外へ続く。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

時期：遺構埋土がＳＫ１第３層と同埋土のため13世紀代と考えられる。

ＳＤ２（第18図）

２区ほぼ中央に位置し、ＳＤ３と平行して南北方向に伸びている。２区北端に位置するＳＤ５と同一遺構の可能性がある。規模は検出長1.64m、上場幅0.26～0.30m、深さ５㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰色土の単一層である。遺構内より土師器皿と思われる破片と瓦質土器片が出土しているが、小片のため図示できなかった。

時期：遺構埋土がＳＫ３と同埋土のため中世と考えられる。

ＳＤ３（第19図）

２区ほぼ中央に位置し、弧を描きながら南北方向に伸びている。規模は検出長4.90m、上場幅0.40～0.66m、深さ８㎝を測り、南端は調査区外へ続く。断面形態は皿状を呈する。埋土は２層に分かれ、第１層灰色土、第２層やや粘質の褐色土である。遺構内より土鍋と思われる土師器片など数点が出土しているが、小片のため図示できなかった。

時期：出土遺物と、埋土第１層がＳＫ３と同埋土のため中世と考えられる。

ＳＤ４（第20図）

２区南西隅に位置し、北西－南東方向に伸びている。規模は検出長0.61m、上場幅0.20m、深さ14㎝を測る。断面形態はＵ字状を呈する。埋土は、炭を含む褐色土の単一層である。遺構内より土鍋と思われる土師器片が出土しているが、小片のため図示できなかった。

時期：出土遺物から中世と考えられる。

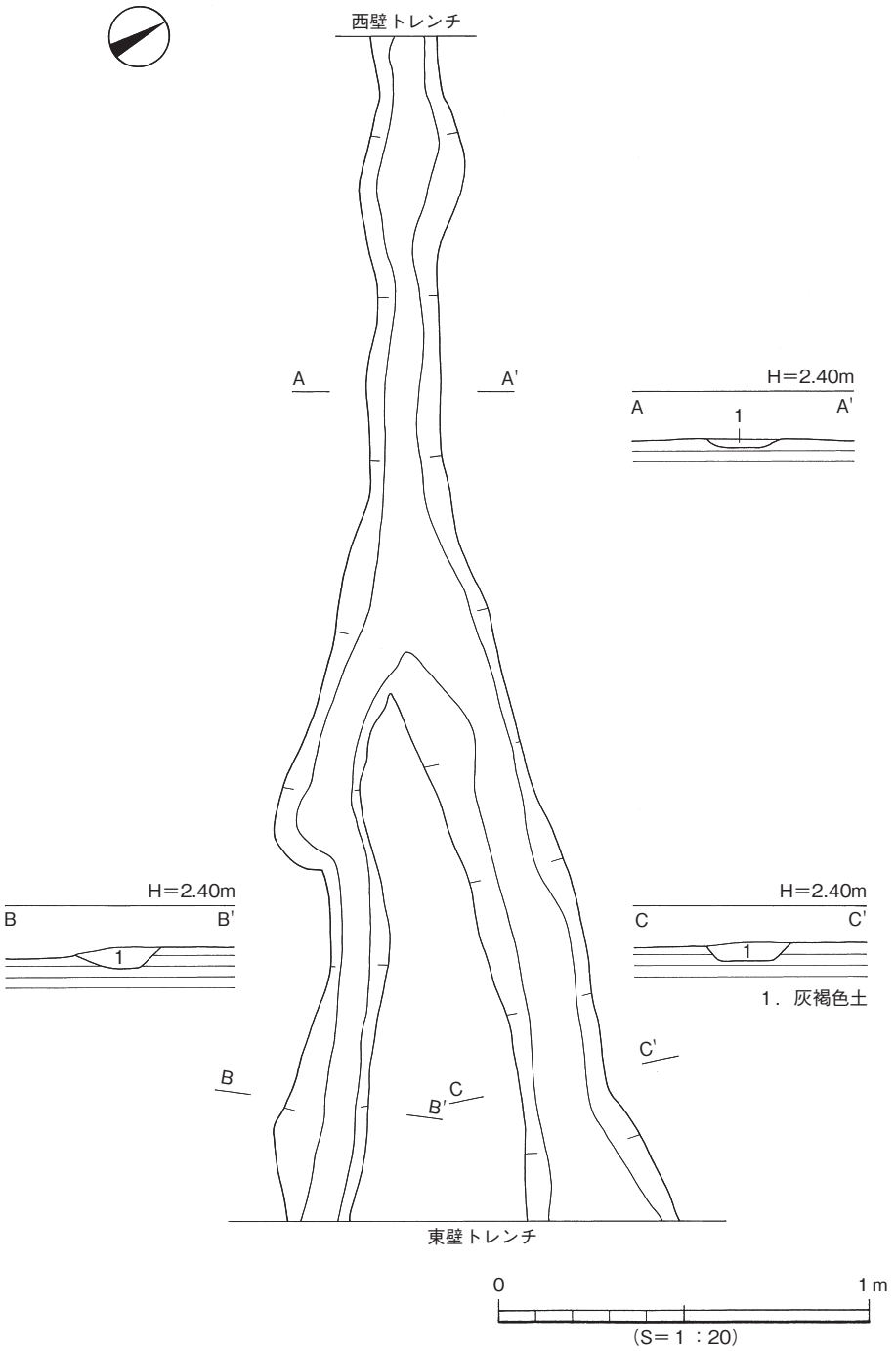
ＳＤ５（第21図）

２区北端に位置し、北東－南西方向に伸びている。ＳＤ２と同一遺構の可能性があり、仮に同一遺構であるとするならば、ＳＤ３に平行して弧を描きながら存在していた可能性がある。規模は検出長1.72m、上場幅0.24～0.29m、深さ３㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰色土の単一層である。遺物は出土していない。

時期：遺構埋土がＳＫ３と同埋土のため中世と考えられる。

（３）柱穴（ＳＰ）

柱穴は87基を検出したが、建物等を復元できる配置での検出はみられなかった。埋土は、埋土Ａ：灰褐色土、埋土Ｂ：灰色土、埋土Ｃ：褐色土、埋土Ｄ：黄灰色土の４種に分けられる。

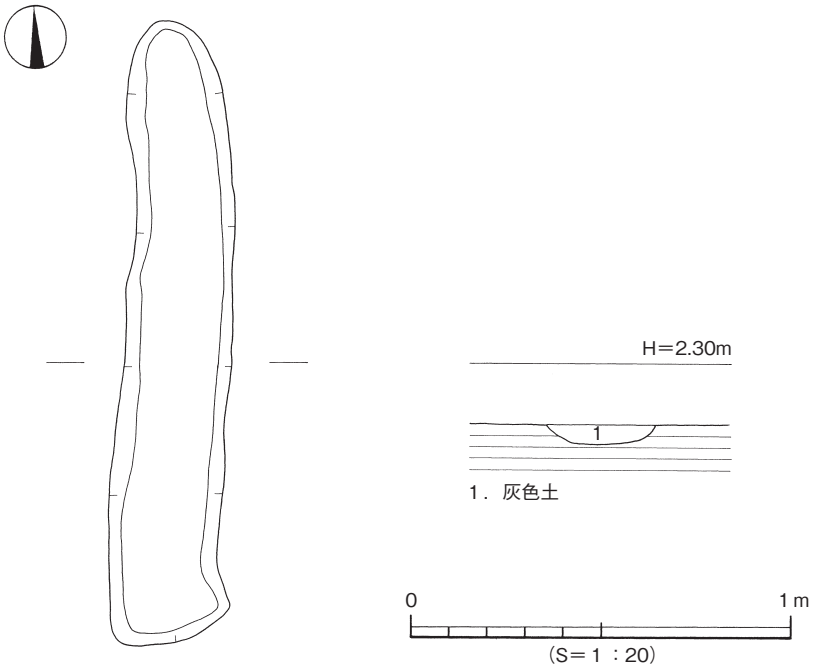


第17図　ＳＤ１測量図

埋土Ａは45基で、調査区全域、特に１区で多数検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径15～55cm、深さ10～30cmを測る。遺物は土師器片・鉄滓・炭が出土した。

埋土Ｂは37基で、調査区全域で検出し、特に２区南半部で多数検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径15～48cm、深さ６～17cmを測る。遺物は土師器片・石製品・鉄滓が出土した。

埋土Ｃは３基で、２区南半部で検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径15～30cm、深さ15～16cmを測る。遺物は図示できていないが、土師器片が出土した。



第18図　ＳＤ２測量図

埋土Ｄは２基で、２区南半部で検出した。平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径20～25cm、深さ８～13cmを測る。遺物は出土していない。

以下におもな遺物が出土した柱穴を測量図とともに掲載する。

ＳＰ72（第22図、図版19）

２区南端に位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は径20×15cm、深さ８cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰色土の単一層である。第Ｖ層を精査中に遺物（石臼）を確認したが、当初は遺構の輪郭を確認できなかった。その後、第Ｖ層を掘り下げ途中において遺構の輪郭を確定し、本来は第Ｖ層上面から掘り窪められたものと考えられる。遺構内からの遺物は石臼のみである。

出土遺物（第22図、図版19・21）

８は石臼である。全体に火を受けた痕跡が残る。石材は花崗岩で、約1/4のみ残存している。

時期：出土遺物と、埋土がＳＫ３と同じため中世と考えられる。

ＳＰ１（第22図）

１区北端に位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は径34×26cm、深さ14cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰色土の単一層である。遺構内より土師器皿が出土している。

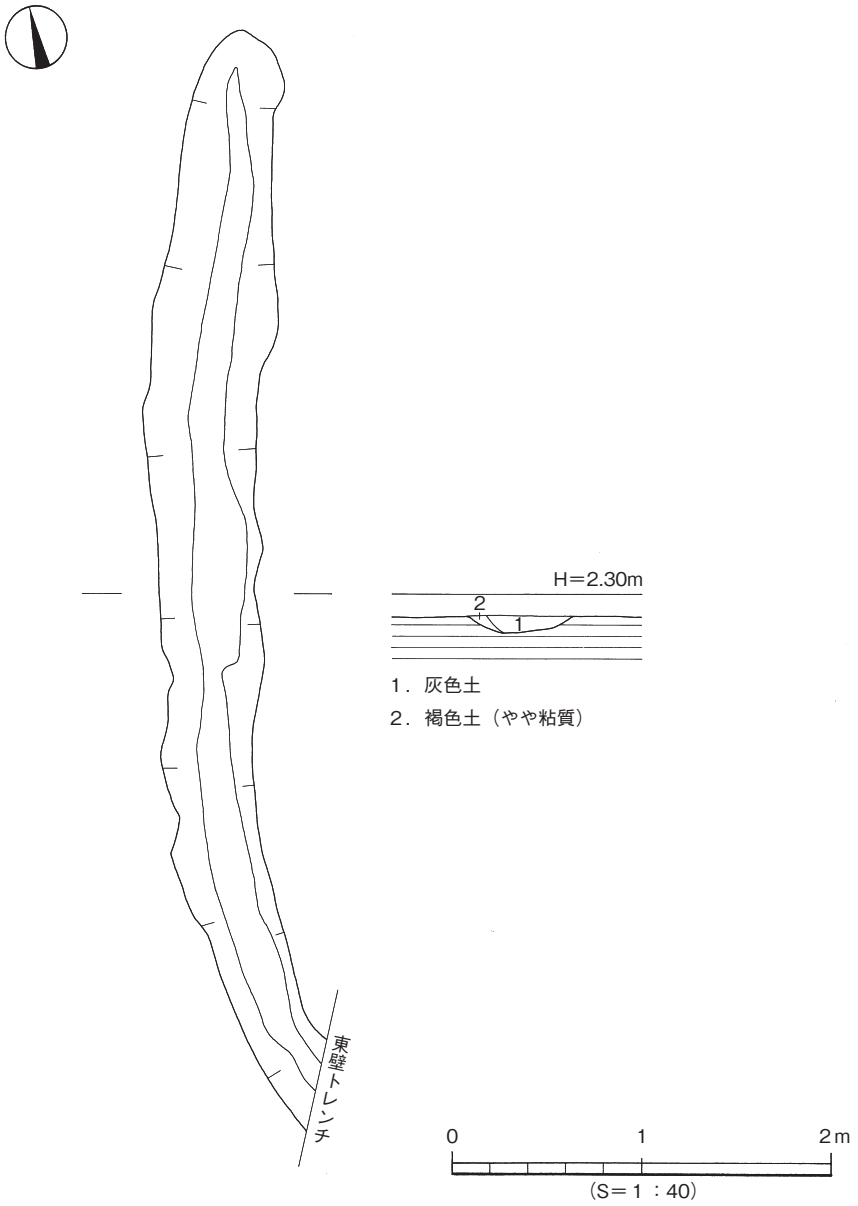
出土遺物（第22図）

９は土師器皿である。回転糸切りと思われる平底の底部片である。

時期：出土遺物と埋土から中世と考えられる。

ＳＰ54（第22図）

２区南寄りに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径20cm、深さ８cmを測る。断面形態はレ



第19図　ＳＤ３測量図

ンズ状を呈する。埋土は灰色土の単一層である。遺構内より土鍋が出土している。

出土遺物（第22図）

10は土鍋である。口縁端部は「コ」の字状で面をもつ。

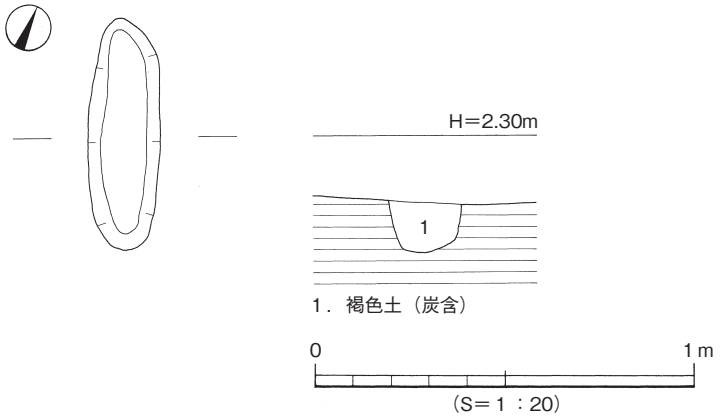
時期：出土遺物から14世紀代と考えられる。

ＳＰ７（第23図、図版15）

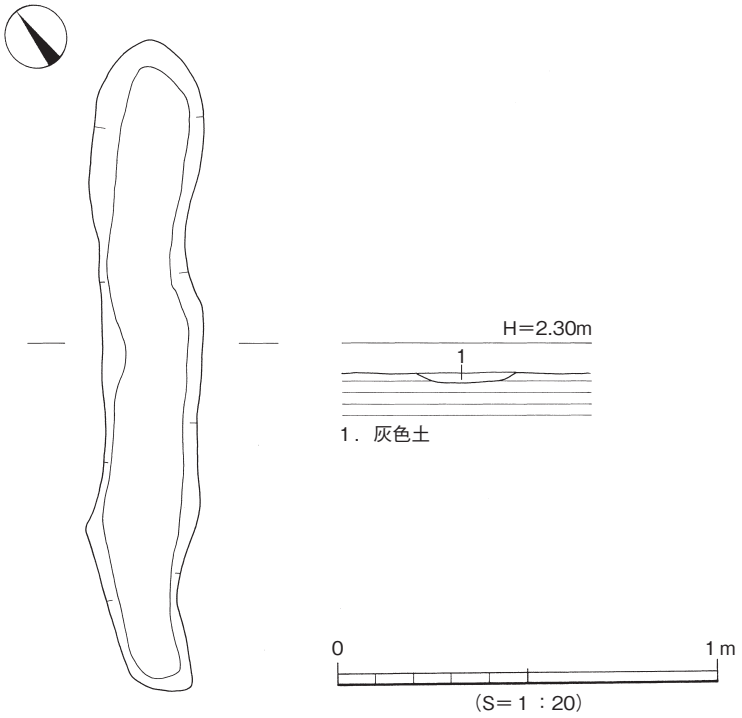
１区中央に位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は径30×25cm、深さ23cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰褐色土の単一層である。遺構内上層より土師器こね鉢が出土している。

出土遺物（第23図、図版15・21）

11は土師器こね鉢である。口縁部片で、口縁部付近でやや外傾する。



第20図　ＳＤ４測量図



第21図　ＳＤ５測量図

時期：出土遺物から14世紀代と考えられる。

ＳＰ29（第23図）

２区北端に位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径26×25㎝、深さ30㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰褐色土の単一層である。遺構内より土師器片と結晶片岩の剝片・炭が出土している。土師器片は小片のため図示できなかった。

出土遺物（第23図）

12は結晶片岩製の不定形の剝片である。

時期：埋土から中世と考えられる。

ＳＰ48（第23図）

２区南寄りに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径30㎝、深さ10㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰色土の単一層である。埋土内より鉄滓が出土している。

出土遺物（第23図）

13は鉄滓である。３～６㎝大を測る塊が６点出土している。

時期：埋土から中世と考えられる。

（４）性格不明遺構（ＳＸ）

平面形態が不確定な遺構３基を検出したため、性格不明遺構とした。３基とも１区で検出した。

ＳＸ１（第24図）

１区北寄りに位置する。平面形態は不整形を呈し、Ｌ字状に折れ曲がる。ＳＰ25・26・27に切られている。規模は長軸1.85ｍ、幅12～20㎝、深さ５～９㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は暗灰褐色土の単一層で西側が深く、溝状に伸びた東側が浅くなる。遺構内より土師器片が出土しているが、小片のため図示できなかった。

時期：遺構埋土がＳＫ１第３層と同埋土のため13世紀代と考えられる。

ＳＸ２（第25図）

１区北寄りに位置する。平面形態は不整形を呈する。東側は調査区外に伸び、ＳＰ44に切られている。規模は長軸1.25ｍ、幅35～70㎝、深さ４㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

時期：ＳＫ１第３層と同埋土のため13世紀代と考えられる。

ＳＸ３（第26図）

１区南寄りに位置する。平面形態は不整形を呈し、東側の柱穴状の深い掘り込みから西方に向かって溝状に伸びた後、三角形状に浅く広がり調査区外に伸びる。規模は長軸2.05ｍ、幅９～100㎝、深さ２～21㎝を測る。断面形態は柱穴状の深い掘り込み部はＵ字状である以外は皿状を呈する。埋土は褐色混じりの灰色土の単一層である。遺物は出土していない。

時期：ＳＫ３と同埋土のため中世と考えられる。

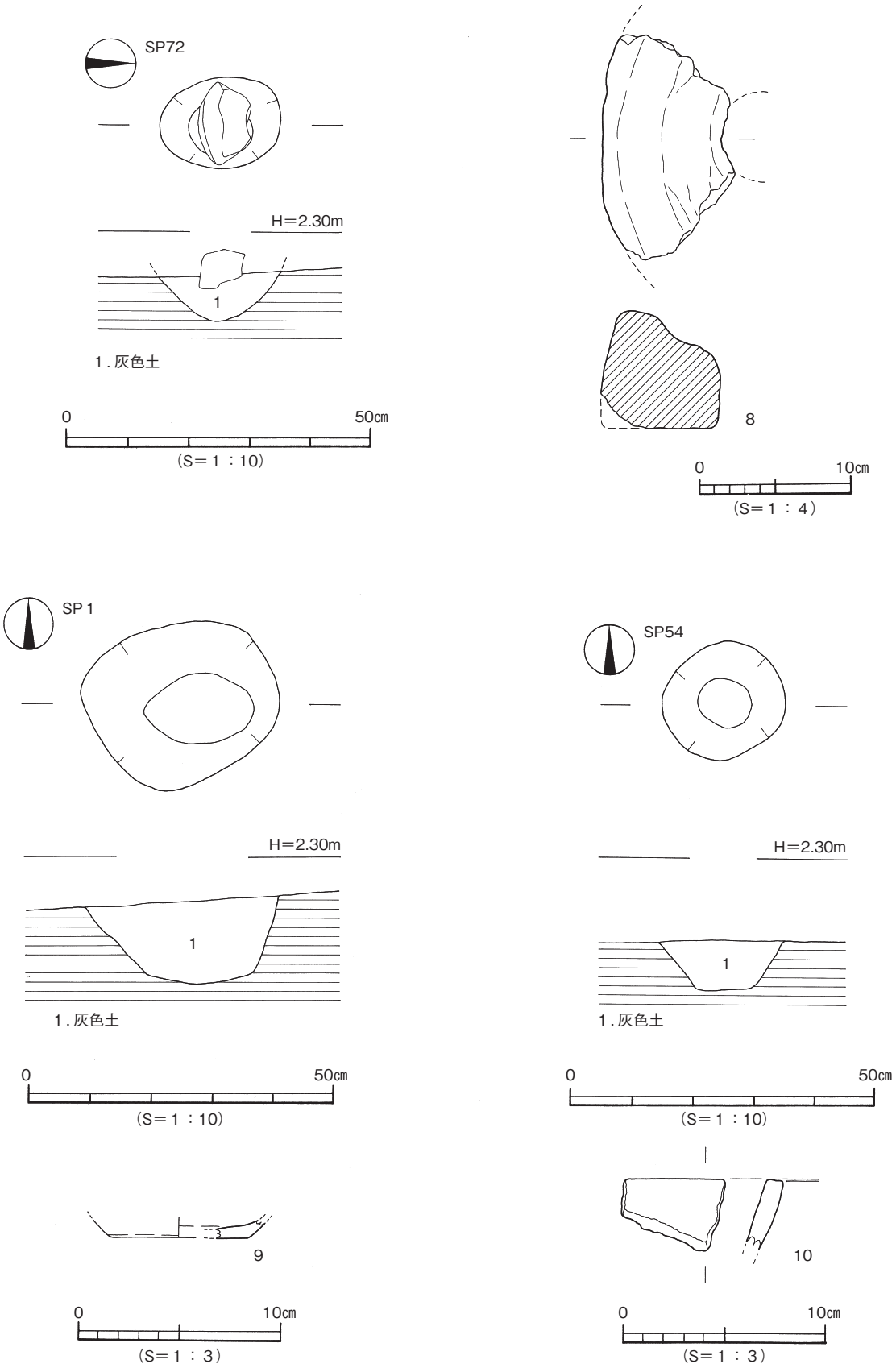
（５）第Ⅰ～Ⅳ層出土遺物

ここでは、第Ⅰ～Ⅳ層で出土した遺物を取り上げる。14～50は２区第Ⅰ・Ⅱ層出土品、51・52は１区第Ⅲ層出土品、53・54は２区第Ⅳ層出土品である。なお、第Ⅰ・Ⅱ層出土品は重機による掘削途中などに出土したものであるため、いずれの層から出土したものであるかは不明である。

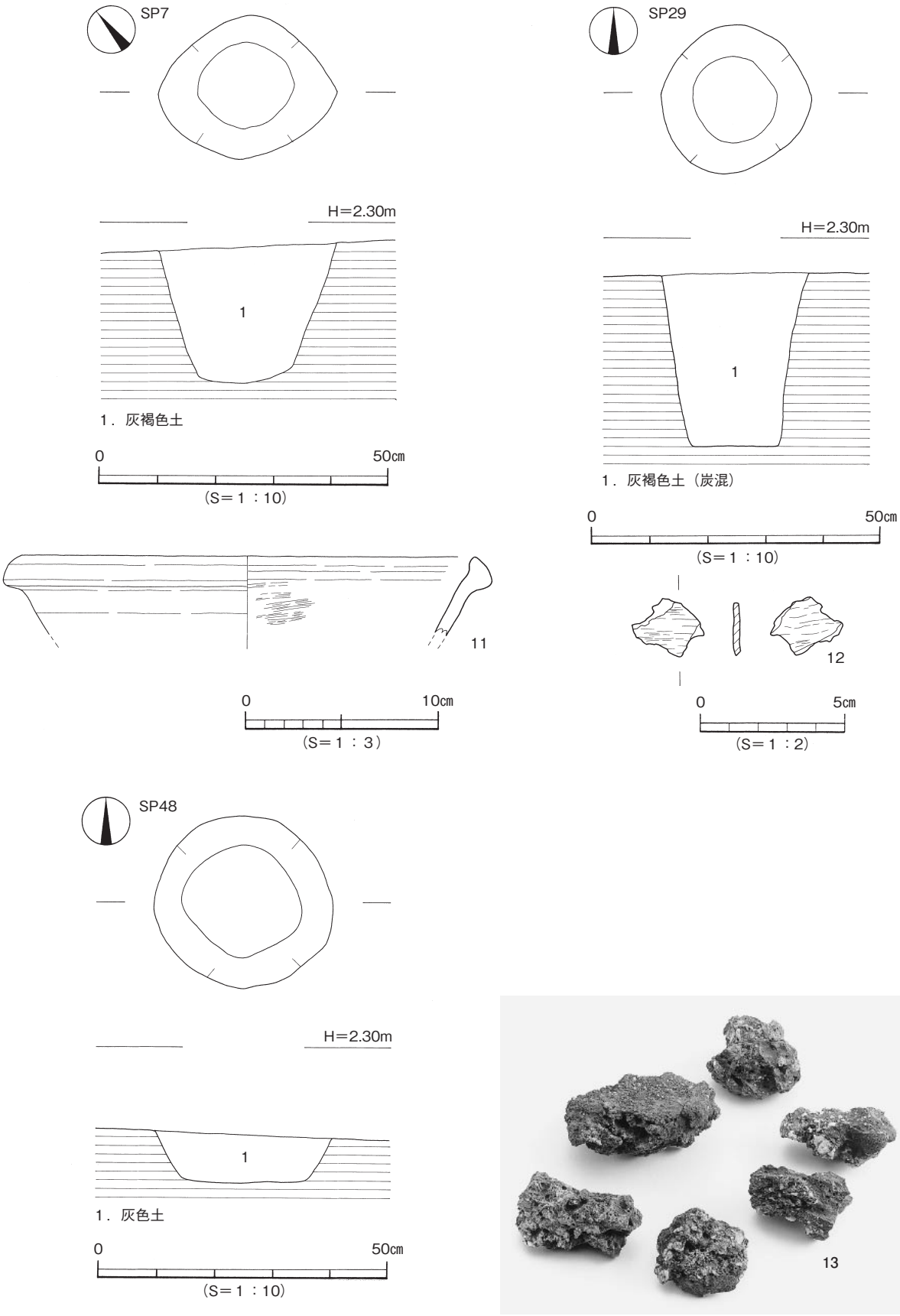
出土遺物（第27～32図、図版21）

１）２区第Ⅰ・Ⅱ層（14～50）

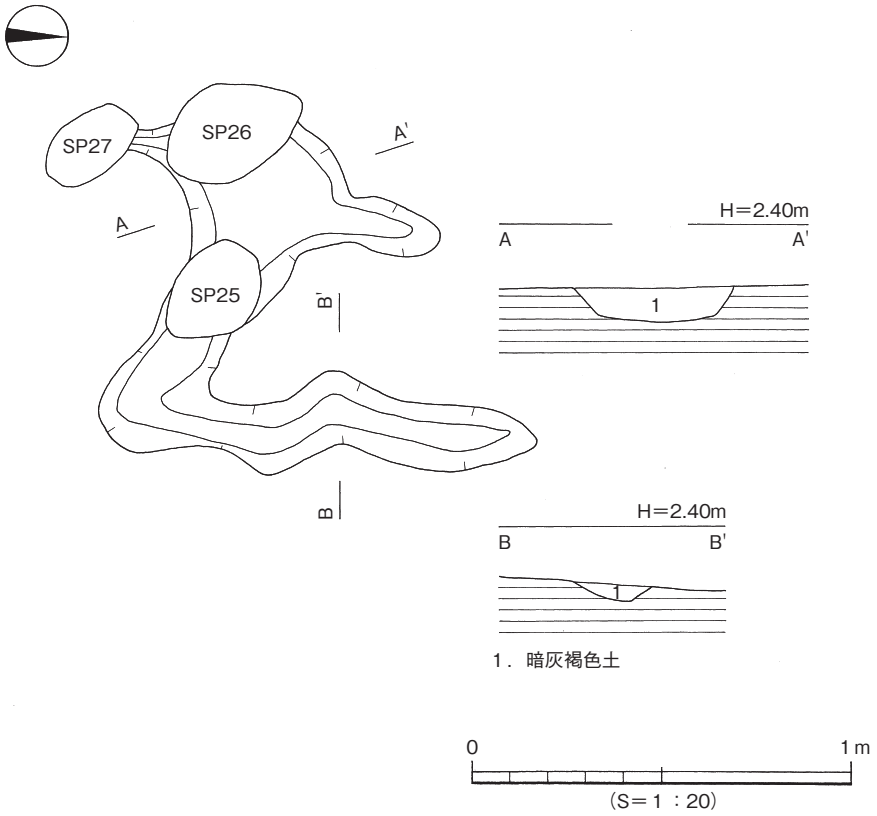
14・15は弥生土器甕である。14は平底の底部片。弥生時代中期。15は平底の底部片で、外面にタタ



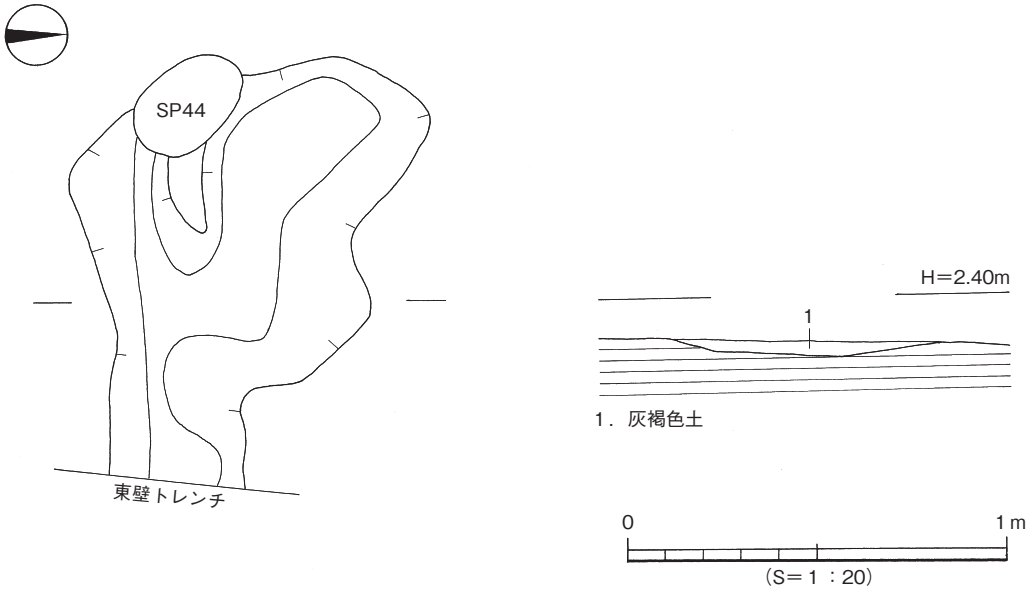
第22図　ＳＰ１・54・72測量図、出土遺物実測図



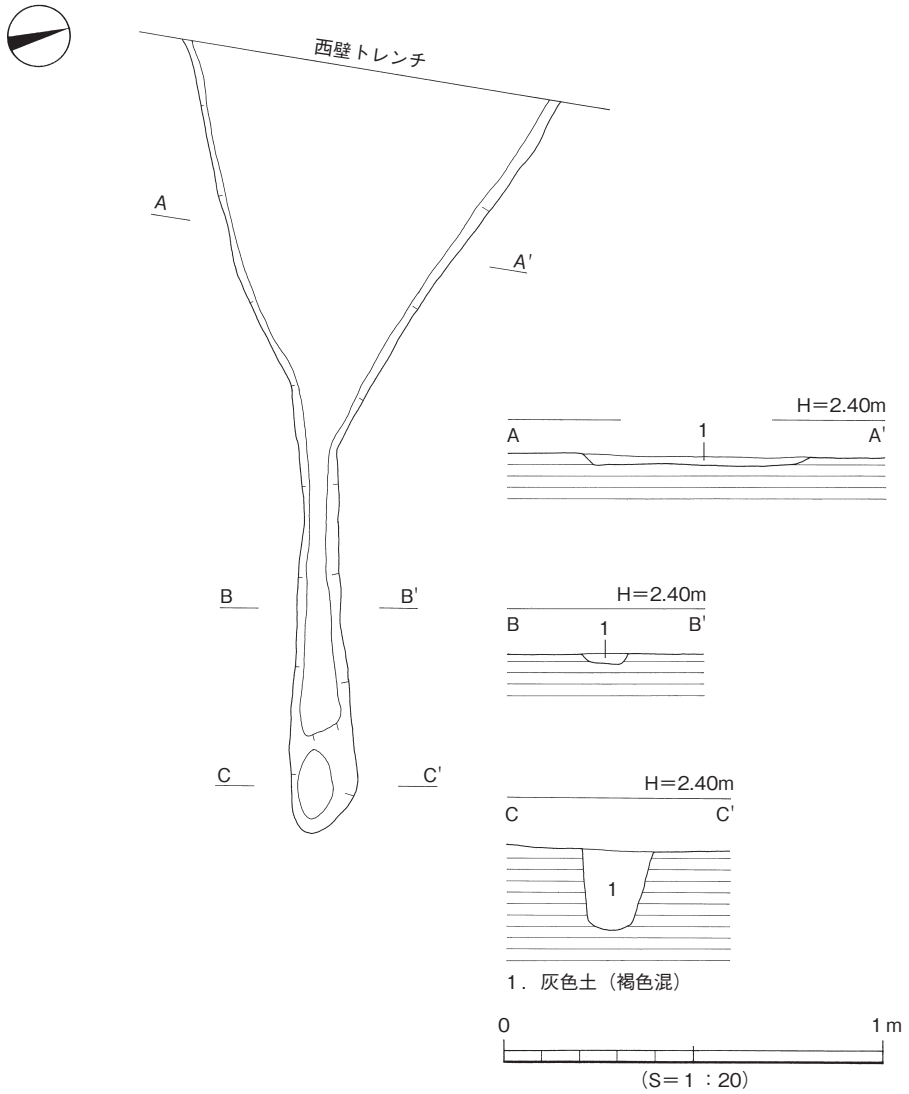
第23図　ＳＰ７・29・48測量図、出土遺物実測図



第24図　ＳＸ１測量図

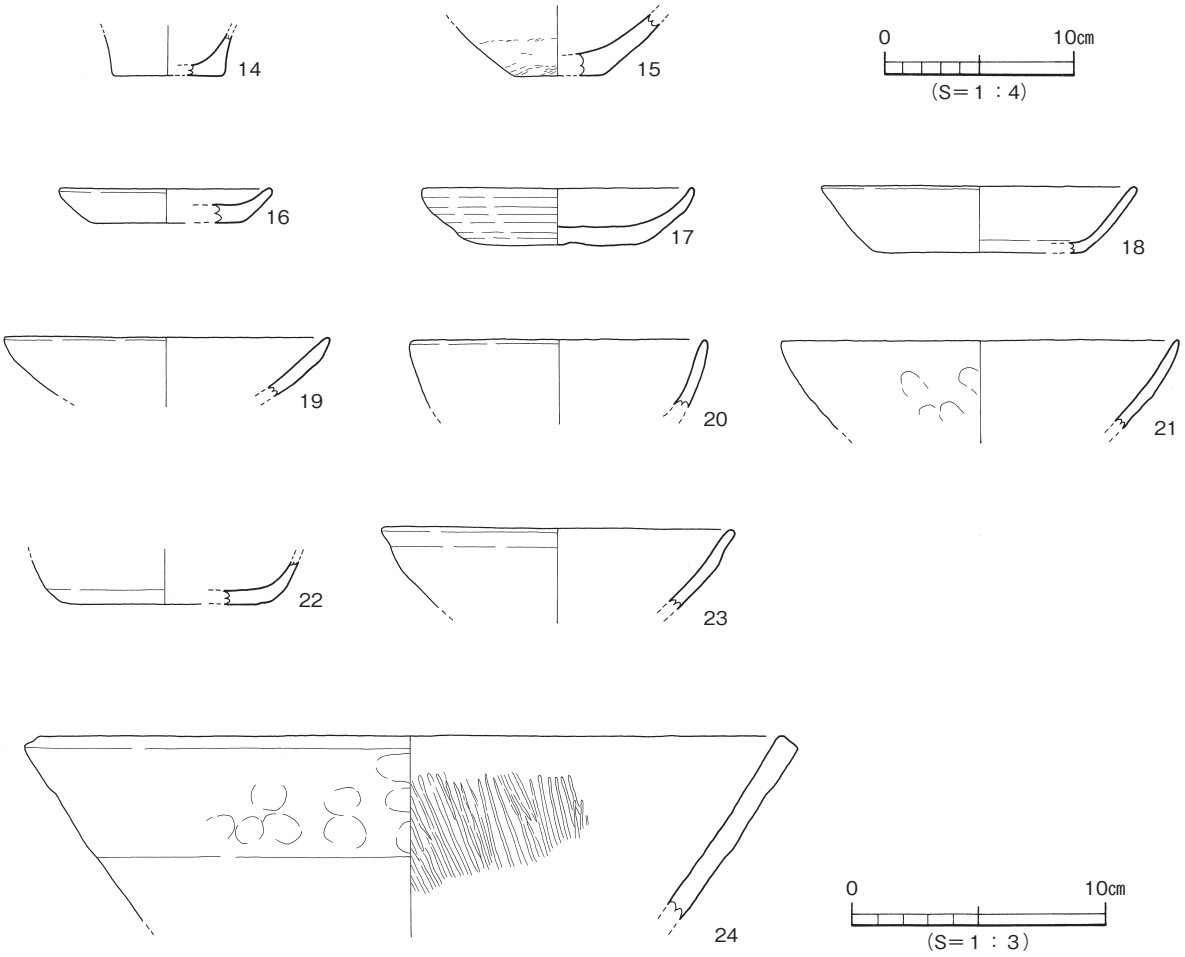


第25図　ＳＸ２測量図



第26図　ＳＸ３測量図

キ痕が残る。弥生時代後期。16は土師器皿で、立ち上がりは短く、浅いつくりである。14世紀中頃。17～19は土師器坏である。17は完形品に近く、底部の切り離しはヘラ切りである。11世紀代。19の口縁端部はやや尖り気味におさめる。20～23は土師器埦である。20の口縁部は屈曲して内湾気味に立ち上がる。22は底部に回転糸切り痕がみられる。24は土師質の摺鉢である。内面に６条の櫛目がみられる。25は瓦質の釜である。口縁端部は断面三角形状に肥厚する。26は土師質のこね鉢である。口縁端部は内外面に拡張し、丸くおさめる。27～30は土師質の土鍋である。14世紀代。27の口縁端部の端面は１条の窪みをもつ。30は外面に煤が付着している。31～42は土釜である。16世紀代。31～34は口縁部下に断面三角形のタガが巡っている。35～39は体部と脚部の接合部、40～42は脚部の先端部片である。43は須恵器坏身である。立ち上がりは短く、内傾する口縁部。６世紀。44は須恵質の坏である。底部の切り離しは回転ヘラ切りと考えられる。45～49は近現代の陶磁器である。45の口縁端部付近はやや外傾する。46の口縁端部は尖り気味におさめる。47の口縁端部は屈曲して尖り気味に丸くおさめる。48は平底の底部。50は管状土錘である。端部を破損している。



第27図　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図(1)

２）１区第Ⅲ層（51・52）

51は土師器埦の底部片である。貼り付け高台。12世紀。52は土釜の口縁部片である。

３）２区第Ⅳ層（53・54）

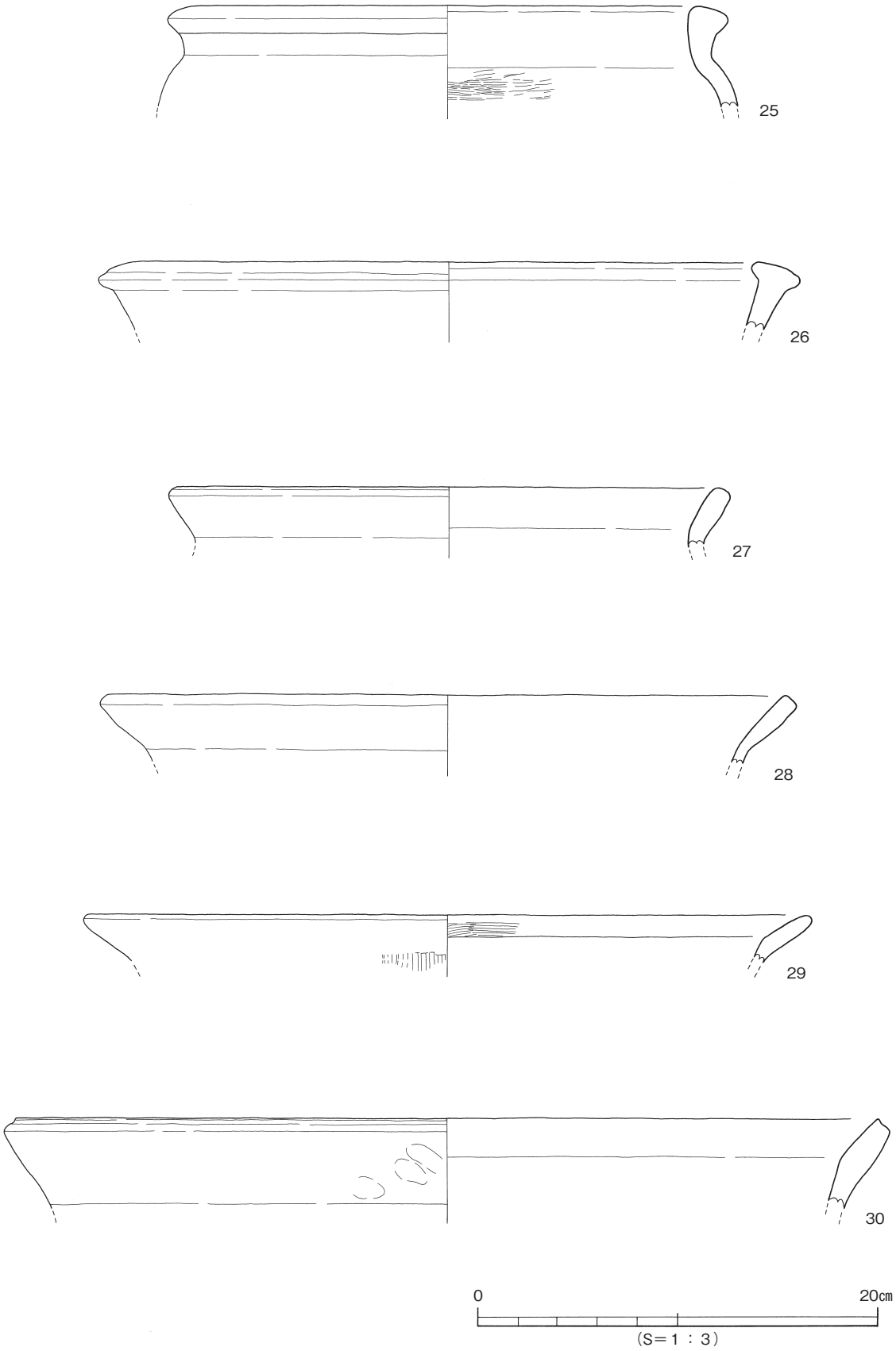
53は土師器皿である。立ち上がりは短く、浅いつくりである。13～14世紀代。54は土師器埦である。口縁端部は丸くおさめる。

（６）出土地点不明遺物

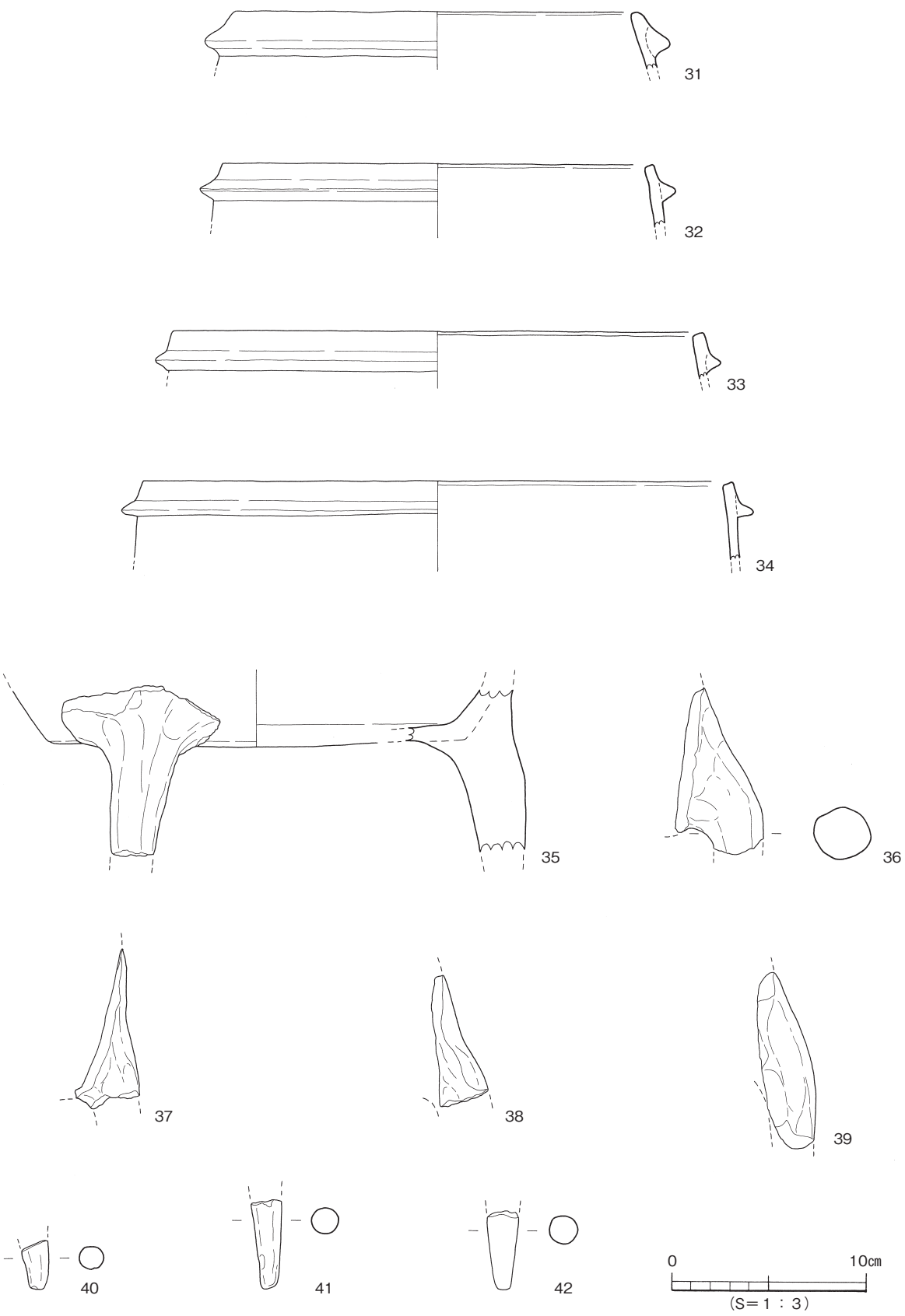
ここでは、出土地点が特定できないものを取り上げる。55～57は１区西壁トレンチ出土品、58は１区表採品である。

出土遺物（第33図、図版21）

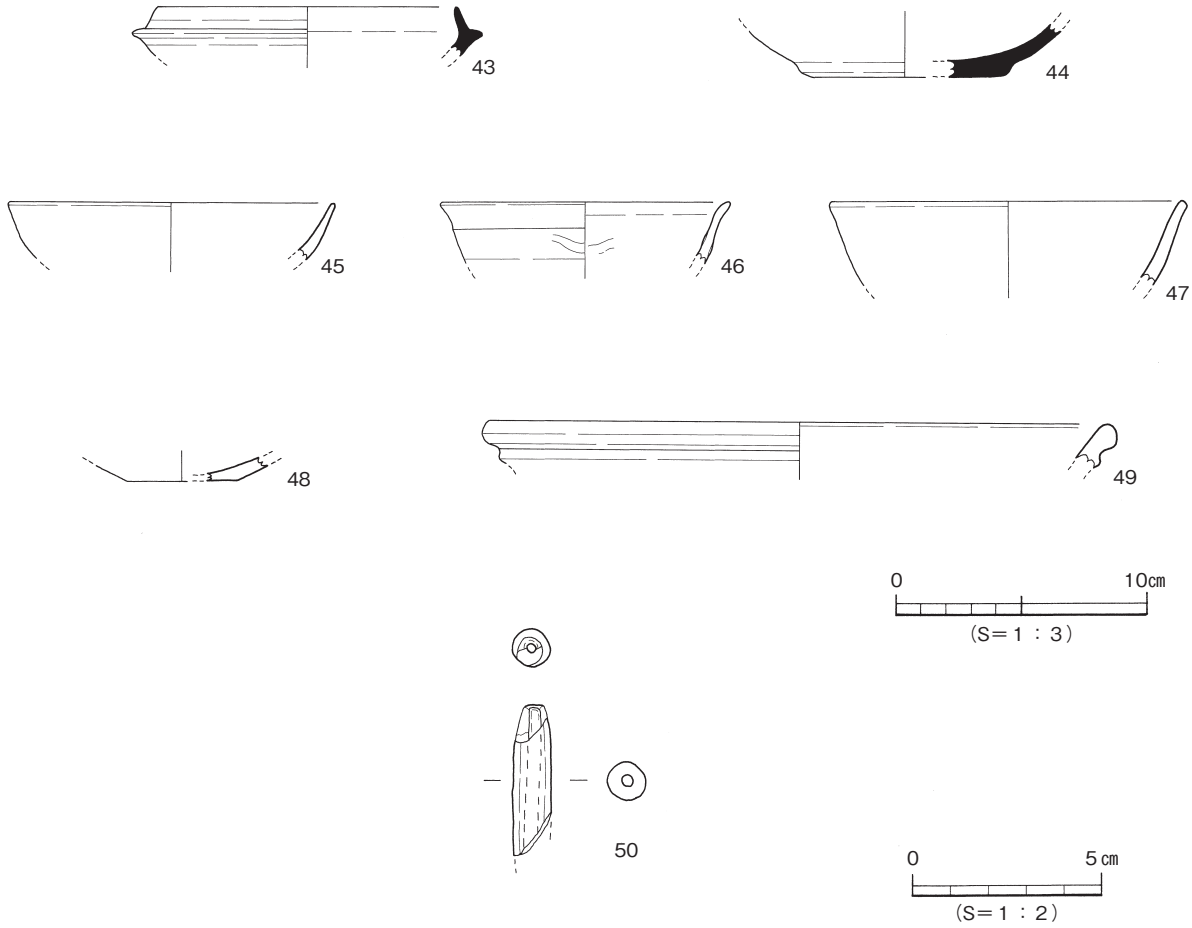
55は弥生土器壺の口縁部片である。全体の摩耗が著しいが、内面に１条の凸帯文が貼り付けられる。弥生時代前期末～中期初頭。56は土師器坏の底部片である。全体に摩耗が激しく、底部切り離し方法が不明である。胎土に褐色粒を多く含む。57は砥石である。断面が2.0×2.5cm程度の細長い方柱状の石材である。砥面が３面あり、残り１面は短軸方向に加工痕が残る。58は須恵器坏蓋の口縁部片である。６世紀代。



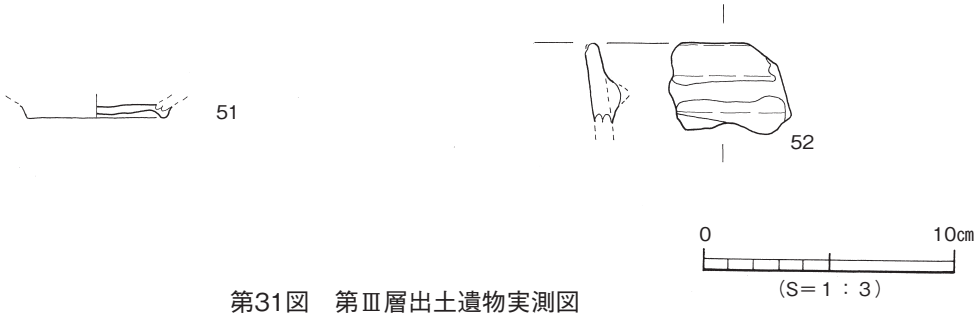
第28図　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図(2)



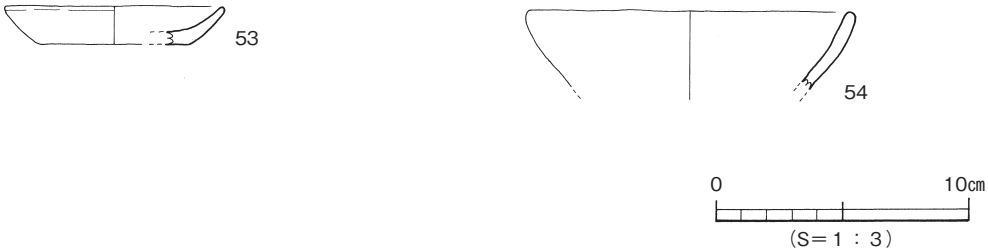
第29図　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図(3)



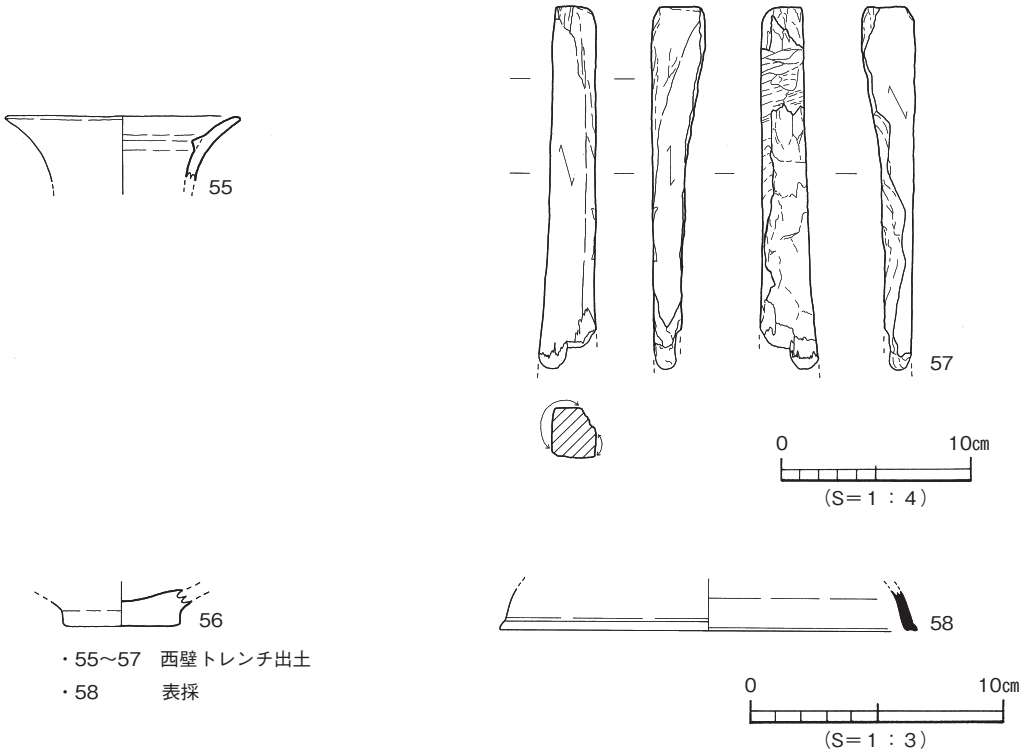
第30図　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図(4)



第31図　第Ⅲ層出土遺物実測図



第32図　第Ⅳ層出土遺物実測図



・55～57　西壁トレンチ出土
・58　　表採

第33図　西壁トレンチ出土遺物及び表採遺物実測図

遺物観察表　－凡例－

（1）以下の表は、本調査区の遺物の計測値及び観察一覧である。
　　遺物観察表は山之内志郎が作成した。

（2）遺物観察表の各掲載について

法　量　欄　（　）：推定復元値。

調　整　欄　土器の各部位名称を略記。
　　例）口→口縁部、拡→拡張部、胴中→胴部中位、胴底→胴部～底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。
　　例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土、金→金雲母。
　　（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
　　例）砂・長（１～３）→「１～３㎜の砂粒・長石を含む」である。
　　焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表１　土坑一覧　(1)

土坑（ＳＫ）	地区	平面形	断面形	規模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時期	備　考
1	1区	不整形	逆台形状	1.1 × 0.83 × 0.16	1層：灰色砂質土 2層：褐色土 3層：灰褐色土(炭混)	土師器	13世紀	二段掘り
2	1区	楕円形	逆台形状	0.67 × 0.6 × 0.21	灰色土	土師器	中世	
3	1区	楕円形	逆台形状	(0.55) × 0.4 × 0.11	灰色土	土師器・土錘・陶器	中世	ＳＰ21に切られる。
4	2区	楕円形	皿状	(0.71) × 0.35 × 0.04	灰褐色土	なし	13世紀	東壁トレンチに切られる。

土坑一覧 (2)

土坑（ＳＫ）	地区	平面形	断面形	規模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時期	備　　考
5	２区	不整形	舟底状	1.05 × 0.82 × 0.11	１層：灰褐色土(炭混) ２層：黄灰色土	土師器 鉄釘	13 世紀	
6	２区	隅丸方形	逆台形状	0.81 × 0.6 × 0.29	１層：灰色土 ２層：灰色土(粗砂含)	土師器	中世	
7	２区	楕円形	皿状	0.93 × 0.71 × 0.04	灰色土	土師器	中世	

表２　溝一覧

溝（ＳＤ）	地区	断面形	規模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	方向	埋　土	出土遺物	時期	備　　考
1	１区	皿状	(3.2) × 0.15 ～ 0.28 × 0.02～ 0.06	東西	灰褐色土	なし	13 世紀	東・西壁トレンチに切られる。
2	２区	皿状	1.64 × 0.26 ～ 0.30 × 0.05	南北	灰色土	土師器 瓦質土器	中世	ＳＤ５と同一遺構か。
3	２区	皿状	(4.9) × 0.40 ～ 0.66 × 0.08	南北	１層：灰色土 ２層：褐色土	土師器	中世	東壁トレンチに切られる。
4	２区	Ｕ字状	0.61 × 0.20 × 0.14	北西－南東	褐色土	土師器	中世	
5	２区	皿状	1.72 × 0.24 ～ 0.29 × 0.03	北東－南西	灰色土	なし	中世	ＳＤ２と同一遺構か。

表３　試掘トレンチ出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形　態　・　施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備　考	図版
1	皿	口径（7.2） 底径（4.9） 器高　2.1	平底。底部より内湾気味に立ち上がる。口端部は丸い。	底 回転糸切り	摩滅のため 不明	にぶい橙色 にぶい橙色	微砂粒 ◎	試掘トレンチ	21
2	土釜	残高　3.7	口縁部片。内湾気味に立ち上がる口縁部。貼り付けられたタガは、水平に外方向に伸びる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 浅黄橙色	石（1 ～ 2） 長（1） ◎	試掘トレンチ	

表４　ＳＫ出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形　態　・　施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備　考	図版
3	皿	口径（10.6） 残高　1.7	外傾する口縁部片。口端部は丸くおさめる。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	微砂粒 ◎	ＳＫ１	
4	坏	底径（4.6） 残高　1.2	陶磁器。平底の底部片。	胴 ケズリ 底 ナデ	回転ナデ	灰褐色 暗赤褐色	微砂粒 ◎	ＳＫ３	
5	土錘	長さ　3.6 直径　1.1 孔径　0.4 重さ　4.38ｇ	円柱状の小型品。	ナデ	不明	黄茶色 黄茶色	微砂粒 ◎	ＳＫ３	21
6	皿	底径（6.4） 残高　0.8	平底の底部片。	摩滅のため 不明	ナデ	浅黄橙色 灰白色	微砂粒 ◎	ＳＫ５	

表５　ＳＫ出土遺物観察表　鉄製品

番号	器　　種	遺存状態	材　　質	法　量 長さ（㎝）	法　量 幅（㎝）	法　量 厚さ（㎝）	法　量 重さ（ｇ）	備　　考	図版
7	鉄釘	頭部欠損	鉄	3.6	0.6	0.4	1.12	ＳＫ５	21

表６　ＳＰ出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（㎝）	形　態　・　施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調（外面）（内面）	胎　土 焼　成	備　考	図版
9	皿	底径（6.6） 残高　0.9	平底の底部片。	摩滅のため 不明	摩滅のため 不明	浅黄橙色 浅黄色	石（1） ◎	ＳＰ１	
10	土鍋	残高　3.5	内湾気味に立ち上がる口縁部片。口端部は「コ」の字状で面を持つ。	摩滅のため 不明	ヨコナデ	灰黄橙色 にぶい黄褐色	石･長(1～4) ◎	ＳＰ 54	
11	こね鉢	口径（25.2） 残高　4.1	外反する口縁部片。口端部は上下に拡張する。	摩滅のため 不明	口　ナデ 胴　ハケ （12 本／㎝）	にぶい橙色 灰白色	微砂粒 ◎	ＳＰ７	21

表７　ＳＰ出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）		
8	石臼	1/4	花崗岩	推定直径 28.0	推定孔径 6.0	7.7	937.45	ＳＰ72	21
12	剝片	不明	結晶片岩	2.4	1.8	0.2	1.25	ＳＰ29	

表８　第Ⅰ～Ⅳ層出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
14	甕	底径（6.0） 残高　2.3	平底。器壁が薄いつくり。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 浅黄色	石･長(1) ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	
15	甕	底径（4.6） 残高　3.2	平底。外面にタタキ痕が残る。	胴　タタキ 底　ナデ	ナデ	橙色 黒色	石･長(1～5) ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	
16	皿	口径（8.4） 底径（6.0） 器高　1.4	立ち上がりは短く､浅いつくりである。口端部は丸い。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 灰黄褐色	石･長(1) 金雲母 ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	
17	坏	口径（10.7） 底径　6.6 器高　2.3	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。口端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 淡黄色	石･長(1) 金雲母 ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
18	坏	口径（12.4） 底径（8.3） 器高　2.6	直線的に立ち上がる。口端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 にぶい黄橙色	微砂粒 金雲母 ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	
19	坏	口径（12.8） 残高　2.3	口端部は尖り気味におさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石(1～2) 長(1) 金雲母 ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	
20	埦	口径（11.8） 残高　2.7	内湾気味に立ち上がる。口端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石(1～2) 長(1) 金雲母 ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	
21	埦	口径（15.6） 残高　3.5	体部～口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる。口端部はやや尖る。	ナデ	ナデ	淡橙色･灰白色 浅黄橙色	石･長(1) 金雲母 ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
22	埦	底径（8.2） 残高　1.7	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1) 長(1～3) ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
23	埦	口径（13.9） 残高　3.2	体部～口縁部にかけて若干屈曲して内湾気味に立ち上がる。口端部は丸い。	ナデ	ナデ	灰色 暗灰色	石･長(1) ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	
24	摺鉢	口径（30.5） 残高　7.2	外傾して立ち上がる口縁部。口端部は「コ」の字状で面を持つ。	ナデ（指頭痕あり）	ナデ	灰白色 灰黄色	石･長(1～4) 金雲母 ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
25	土釜	口径（27.8） 残高　5.0	瓦質土器の口縁部片。口縁部は直立し、端部は肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色～黒褐色 灰白色	石･長(1～5) ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
26	こね鉢	口径（34.7） 残高　3.4	内湾気味に立ち上がる口縁部。口端部は内外面に肥厚し、丸みを帯びた面を持つ。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石(1～4) 長(1～3) ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
27	土鍋	口径（27.8） 残高　2.9	外傾する口縁部。口端部は「コ」の字状で１条の窪みをもつ。	ナデ	ナデ	暗褐色 にぶい黄橙色	石･長(1～2) ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	
28	土鍋	口径（34.5） 残高　3.4	外傾する口縁部。口端部は「コ」の字状で面を持つ。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1～3) 長(1～2) ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	
29	土鍋	口径（36.0） 残高　2.4	外傾する口縁部。口端部は丸い。	口 ナデ 胴 ハケ （6本／cm）	口 ハケ （6本／cm） 胴 ナデ	明褐色 明褐色	石･長(1～2) 金雲母 ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	
30	土鍋	口径（43.8） 残高　4.4	外傾する口縁部。口端部はやや肥厚し「コ」の字状で面を持ち、端面には１条の凹みを持つ。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい橙色	石･長(1～3) ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
31	土釜	口径（20.6） 残高　3.9	口縁部片。内湾気味に立ち上がる口縁部。口縁外面に断面三角形のタガが貼り付けられる。	ヨコナデ	ナデ	灰色 灰黄褐色	石･長(1～3) ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
32	土釜	口径（21.8） 残高　3.1	内湾気味に立ち上がる口縁部。口縁外面に断面三角形のタガが貼り付けられる。	ナデ	摩滅のため不明	にぶい褐色 （煤付着） 灰黄色	石･長(1～4) ◎	２区 第Ⅰ・Ⅱ層	21

第Ⅰ～Ⅳ層出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
33	土釜	口径（26.8） 残高　2.4	内湾気味に立ち上がる口縁部。口縁外面に断面三角形のタガが貼り付けられる。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 （煤付着） にぶい褐色	石･長(1～3) ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
34	土釜	口径（29.8） 残高　4.0	内湾気味に立ち上がる口縁部。口縁外面に断面三角形のタガが貼り付けられる。やや薄いつくり。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 （煤付着） にぶい褐色	石(1) 長(1～3) ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
35	土釜	底径（21.0） 残高　8.2	体部と脚部の接合部。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石･長(1～4) ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
36	土釜	残高　8.3	体部と脚部の接合部。	ナデ	ナデ	橙色・灰褐色 橙色	石･長(1～3) ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
37	土釜	残高　8.1	体部と脚部の接合部。	ナデ	（接合面）	にぶい褐色	石･長(1～3) ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
38	土釜	残高　6.6	体部と脚部の接合部。	ナデ	（接合面）	灰黄色 （煤付着）	石･長(1～3) ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
39	土釜	残高　8.9	体部と脚部の接合部。	ナデ	（接合面）	橙色	石･長(1～2) ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
40	土釜	残高　2.5	脚部片。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	石･長(1) ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
41	土釜	残高　4.5	脚部片。	ナデ	ナデ	にぶい褐色	石(1～4) 長(1～5) ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
42	土釜	残高　4.0	脚部片。	ナデ	ナデ	浅黄色	石･長(1) ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
43	坏身	口径（11.8） 受部径(13.8) 残高　2.0	立ち上がりは短く、内傾する口縁。受部は水平に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	微砂粒 ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
44	坏	底径（8.2） 残高　2.1	平底。底部よりゆるやかに内湾気味に立ち上がる。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
45	碗	口径（12.9） 残高　2.2	陶磁器。内湾気味に立ち上がり、端部付近でやや外傾する。口端部は尖り気味で丸い。	施釉	施釉	灰白色 オリーブ灰色	微砂粒 ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
46	碗	口径（11.4） 残高　2.4	陶磁器。内湾気味に立ち上がり、端部付近でやや外傾する。口端部は尖り気味で丸い。	施釉	施釉	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
47	碗	口径（14.1） 残高　3.3	陶磁器。内湾気味に立ち上がり、端部付近でやや外傾する。口端部は丸い。	施釉	施釉	オリーブ灰色・暗灰黄色 灰色	微砂粒 ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
48	皿	底径（4.3） 残高　0.9	陶磁器。平底の底部。	回転ナデ	施釉	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	
49	甕	口径（25.0） 残高　1.7	陶磁器。口端部下に一条の突帯を持つ。口端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	暗赤褐色	微砂粒 ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
50	土錘	長さ　4.0 直径　1.0 孔径　0.3 重さ　3.94 g	円柱状の小型品。	不明	不明	黄茶色 黄茶色	微砂粒 ◎	2区 第Ⅰ・Ⅱ層	21
51	埦	底径（6.5） 残高　0.6	高台付の底部片。高台端部は丸い。	ナデ	ナデ	黄褐色 橙色	石(1～2) 長(1) ◎	1区 第Ⅲ層	
52	土釜	残高　3.2	口縁部片。内湾気味に立ち上がる口縁部。貼り付けられたタガは、水平に外方向に伸びる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	石･長(1～2) ◎	1区 第Ⅲ層	
53	皿	口径（8.6） 底径（6.0） 器高　1.5	平底。底部より内湾気味に立ち上がる。口端部は丸い。	摩滅のため不明	ヨコナデ	橙色 橙色	石･長(1～2) ◎	2区 第Ⅳ層	
54	埦	口径（13.0） 残高　4.1	体部～口縁部にかけて若干屈曲して直線的に立ち上がる。口端部は丸い。	ナデ	ヨコナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石･長(1) 金雲母 褐色粒 ◎	2区 第Ⅳ層	

表９　西壁トレンチ出土遺物及び表採遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
55	壺	口径（10.4） 残高　3.5	大きく外反する口縁部。内面に凸帯文１条。	摩滅のため不明	摩滅のため不明	橙色 灰黄褐色	石･長(1～2) ◎	１区 西壁トレンチ	
56	坏	底径（4.3） 残高　1.4	平高台。	摩滅のため不明	摩滅のため不明	橙色 にぶい黄橙色	石(1) 長(1～2) 褐色粒 ◎	１区 西壁トレンチ	
58	坏蓋	口径（16.4） 残高　1.6	やや開き気味に垂下する口縁部。口端部は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(3) ◎	１区表採	

表10　西壁トレンチ出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
57	砥石	欠損	白色凝灰岩	(19.1)	2.3	2.6	135.89	１区 西壁トレンチ	21

第４章　調査の成果と課題

今回の調査では、中世集落の構造解明を主目的として調査を実施した。その結果、中世の遺構と弥生時代～近現代の遺物を確認することができた。その中でも、旧北条市域内の平野部において中世の集落関連遺構を検出することができたのは最大の成果である。これまでに同平野部において確認した中世の遺構としては、古代豪族である河野氏に関連する山城のほか、大相院遺跡や別府遺跡において掘立柱建物・土坑・溝・井戸などの遺構と遺物を確認しているのみである。

遺構では、主なものとして土坑７基、溝５条を検出した。特にＳＤ１は東西方向に直線的に伸びた後、中央付近で二股に分かれた遺構であるが、明確に人工的に掘り込まれていると考えられるため、集落内を区画する溝であった可能性が考えられる。また同一遺構と考えられるＳＤ２と５、及びＳＤ３は同時期に存在していた可能性があるため、当時の土地利用の解明には留意しておくべき遺構である。そのほか、狭小な調査区のわりに柱穴を多く検出したにもかかわらず、掘立柱建物を復元できる配置での検出はなかった。今後周辺地域で確認される可能性は高いといえるであろう。

遺物では、土錘がＳＫ３内及び第Ⅰ・Ⅱ層から出土している。本調査地は現海岸線まで約700ｍで標高２ｍ余の低地に立地しているため、当該地域に生活した庶民の生業の実態を知る上で重要な資料である。またＳＰ48では３～６㎝大の鉄滓がまとまって出土している。不要になった鉄滓を廃棄したものと考えられ、周辺域で関連遺構が今後の発掘調査によって確認される可能性がある。そのほか、弥生時代や古墳時代の遺物が第Ⅰ・Ⅱ層で出土していることから、周辺域において当該時期の集落が展開していた可能性が考えられる。

本調査によって、河野氏が活躍した時代及びその前後における庶民の集落関連遺構や生活道具などを確認することができた。今後は周辺域における調査によって更に中世集落の構造とその変遷、あるいはそれ以前の時代における集落の解明に期待したい。

写 真 図 版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、４×５判や６×７判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：カメラ　トヨフィールド45Ａ　レンズ　スーパーアンギュロン90㎜他
アサヒペンタックス67　ペンタックス67　55㎜他
ニコンニューＦＭ２　ズームニッコール28～85㎜他
フィルム　白　黒　ネオパンＳＳ・アクロス
カラー　アスティア100Ｆ

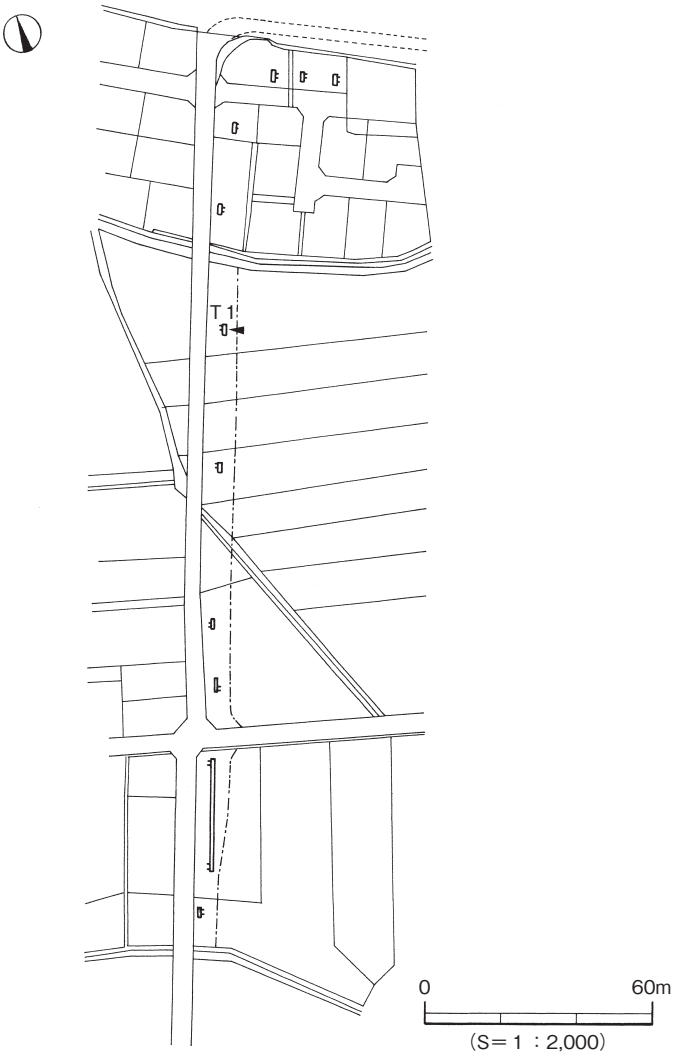
2．遺物は、４×５判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：カメラ　トヨビュー 45G　レンズ　ジンマーＳ240㎜Ｆ5.6他
ストロボ　コメット／ＣＡ32・ＣＢ2400　スタンド等　トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム　ネオパンアクロス

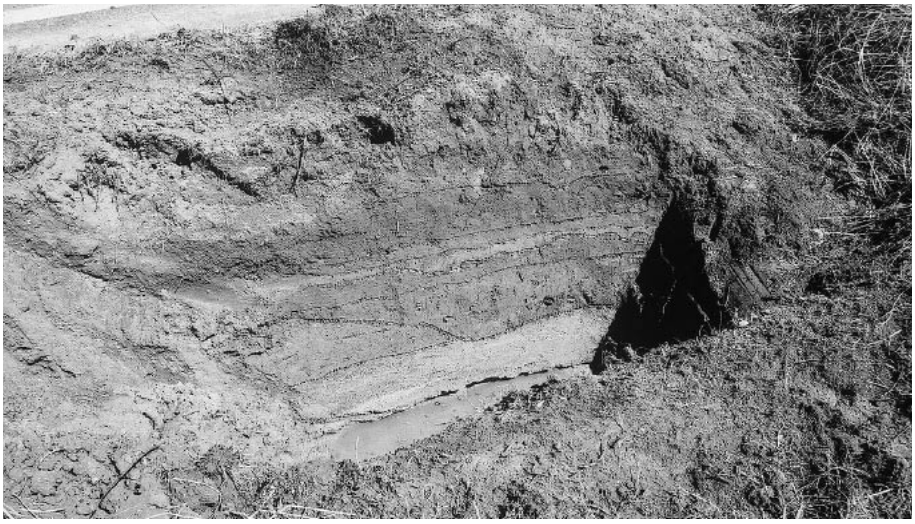
3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：引伸機　ラッキー 450ＭＤ・90ＭＳ
レンズ　エル・ニッコール135㎜ Ｆ5.6Ａ・50㎜ Ｆ2.8Ｎ
印画紙　イルフォードマルチグレードⅣ ＲＣペーパー

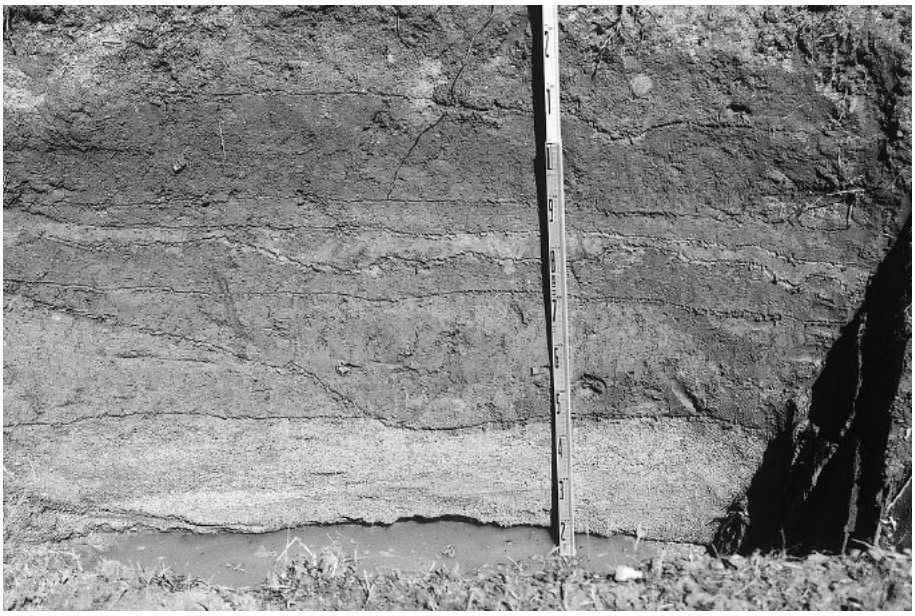
【参考】『埋文写真研究』vol.1～18　『報告書制作ガイド』　［大西朋子］



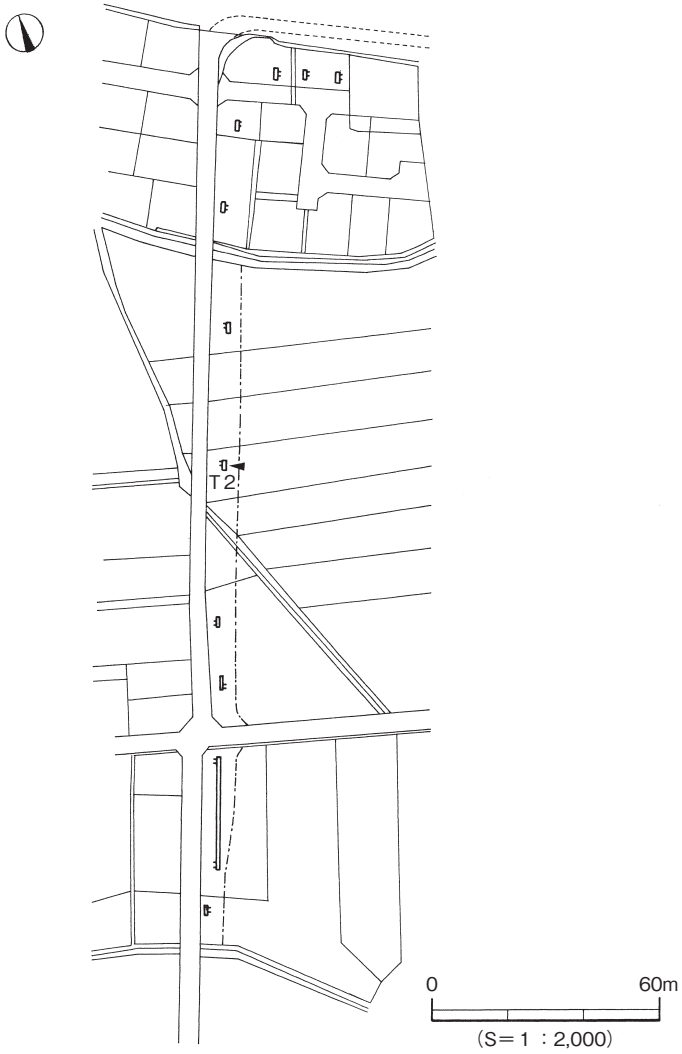
1．Ｔ1調査前風景
（北東より）



2．Ｔ１土層堆積状況(1)
（東より）



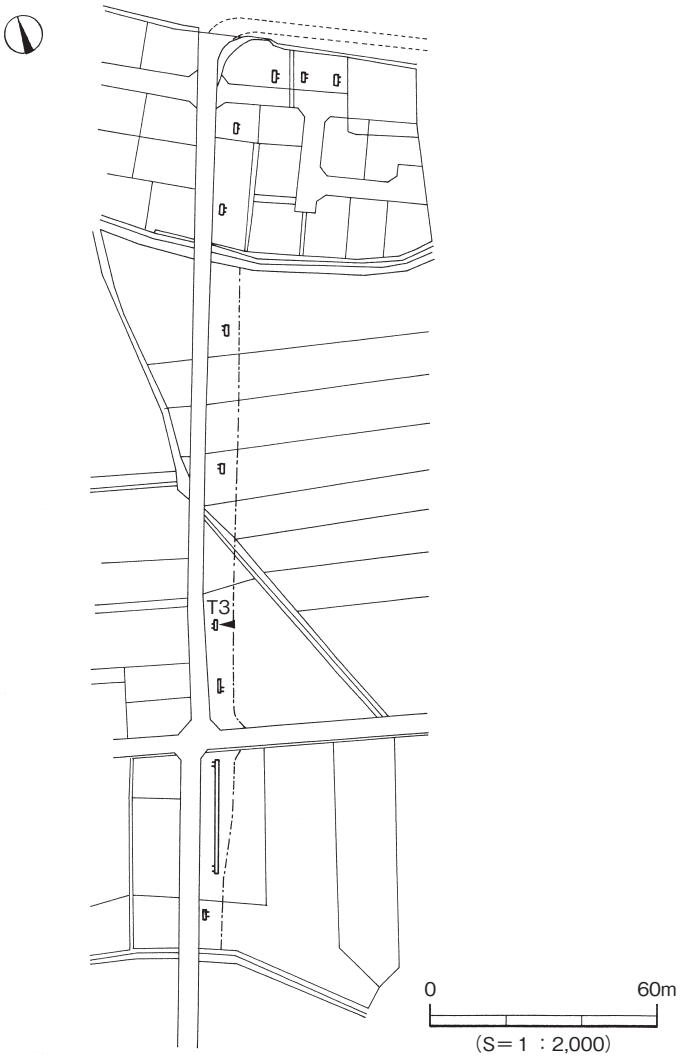
3．Ｔ１土層堆積状況(2)
（東より）


T2
0
60m
(S＝1：2,000)

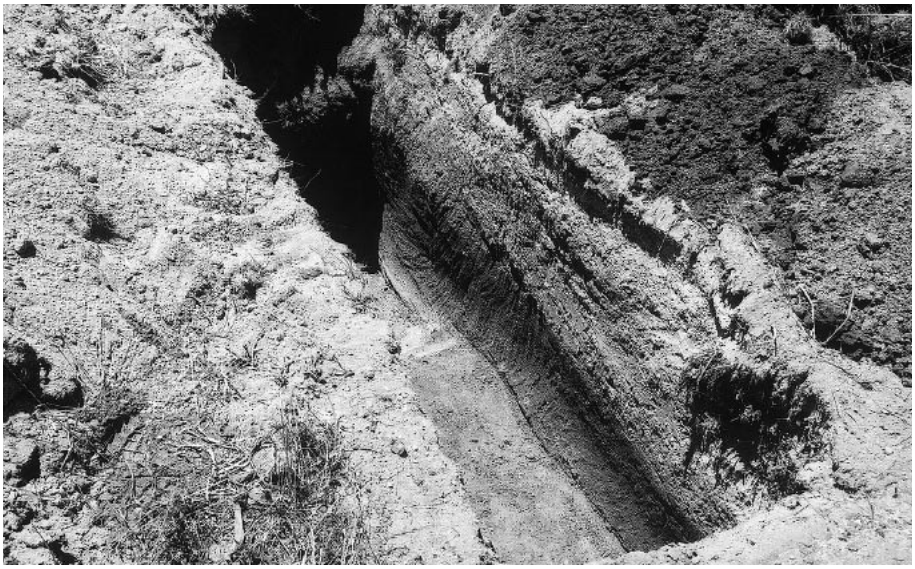
1．Ｔ２作業風景
（北東より）

2．Ｔ２土層堆積状況(1)
（北東より）

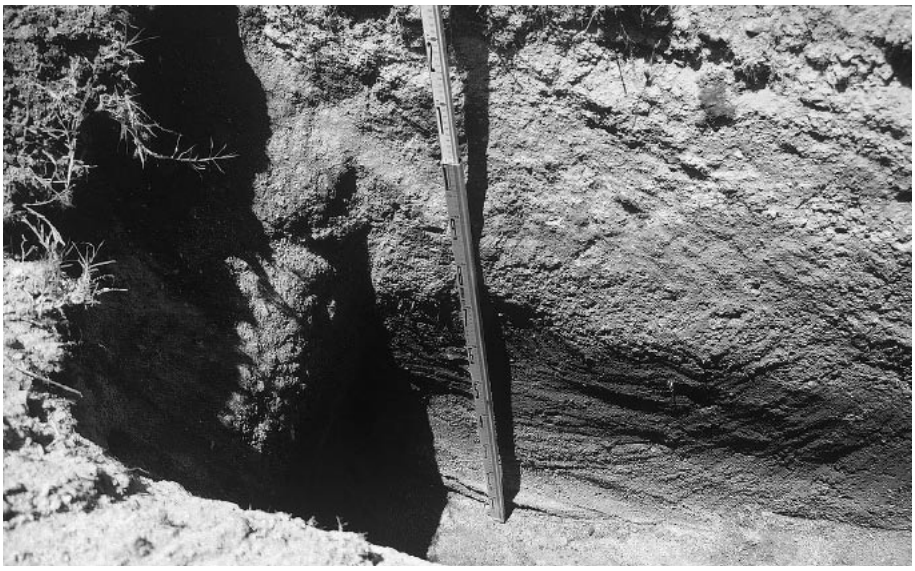
3．Ｔ２土層堆積状況(2)
（東より）


T3
0
60m
(S＝1：2,000)

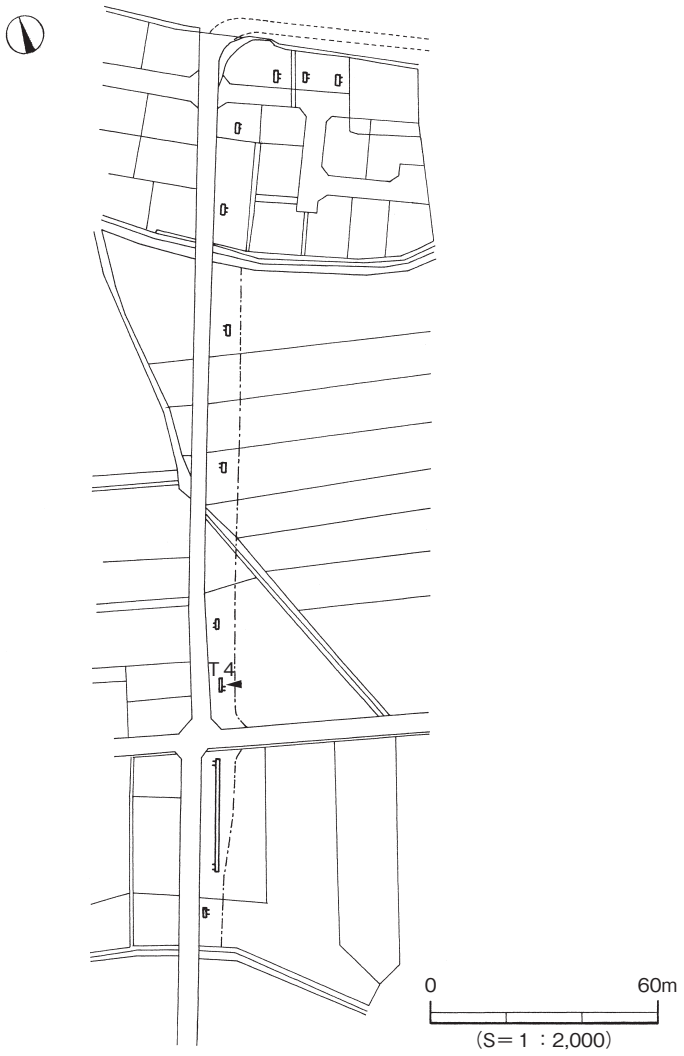
1．Ｔ３掘削状況
（東より）



2．Ｔ３土層堆積状況(1)
（北東より）

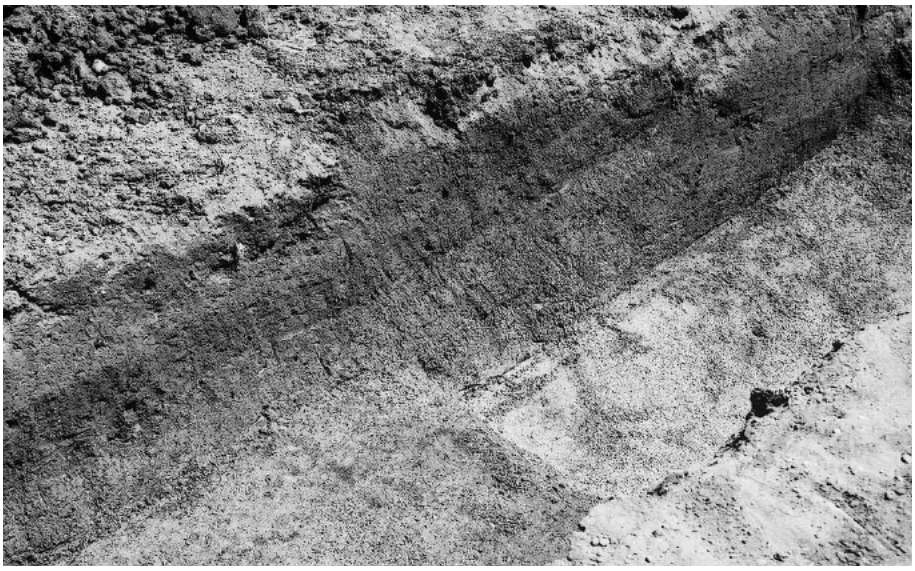


3．Ｔ３土層堆積状況(2)
（東より）

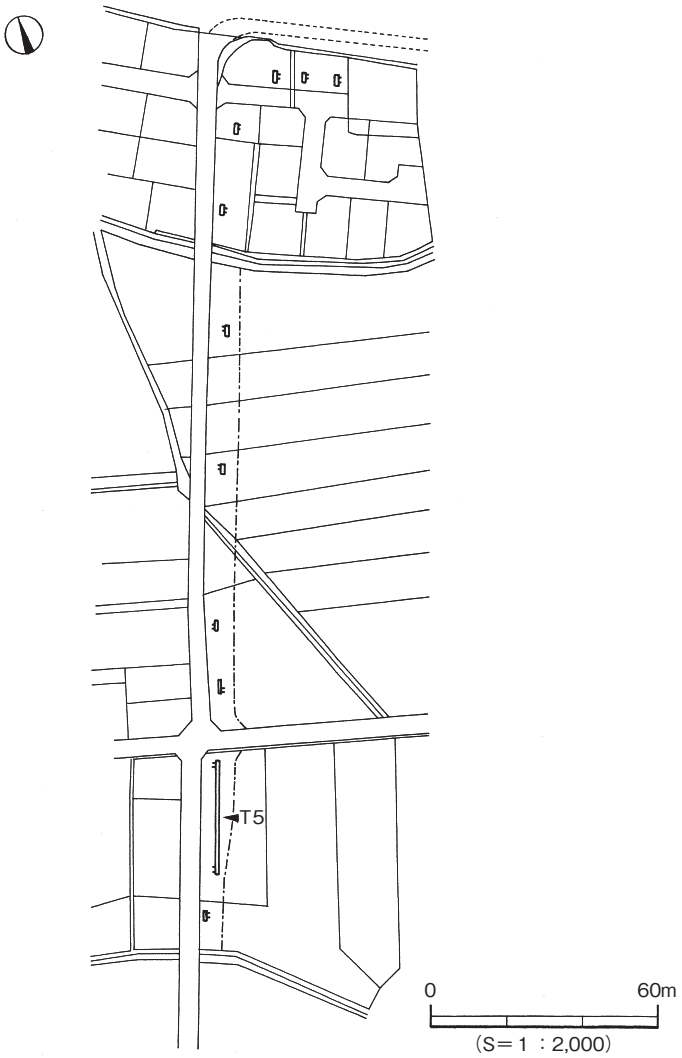

T 4
0
60m
(S＝1：2,000)

1．Ｔ４調査前風景
（北東より）

2．Ｔ４土層堆積状況(1)
（北より）

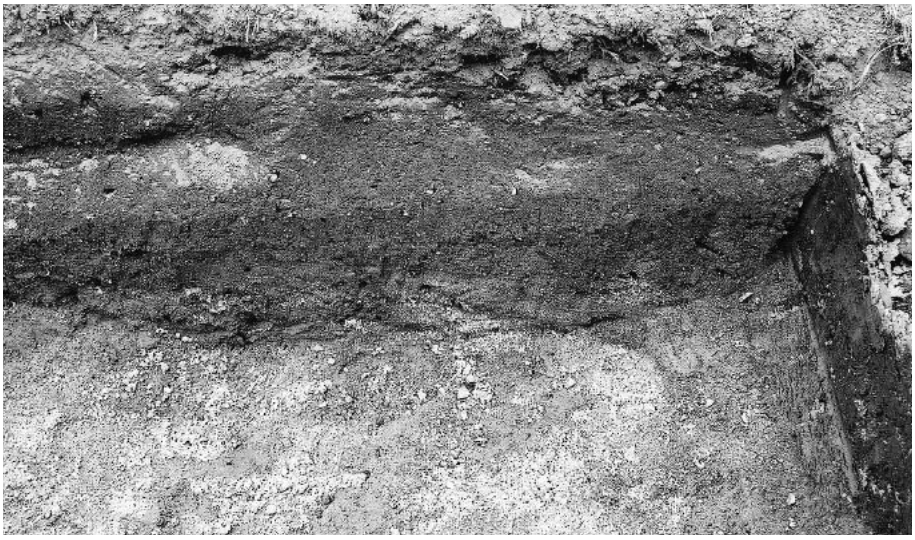


3．Ｔ４土層堆積状況(2)
（北西より）

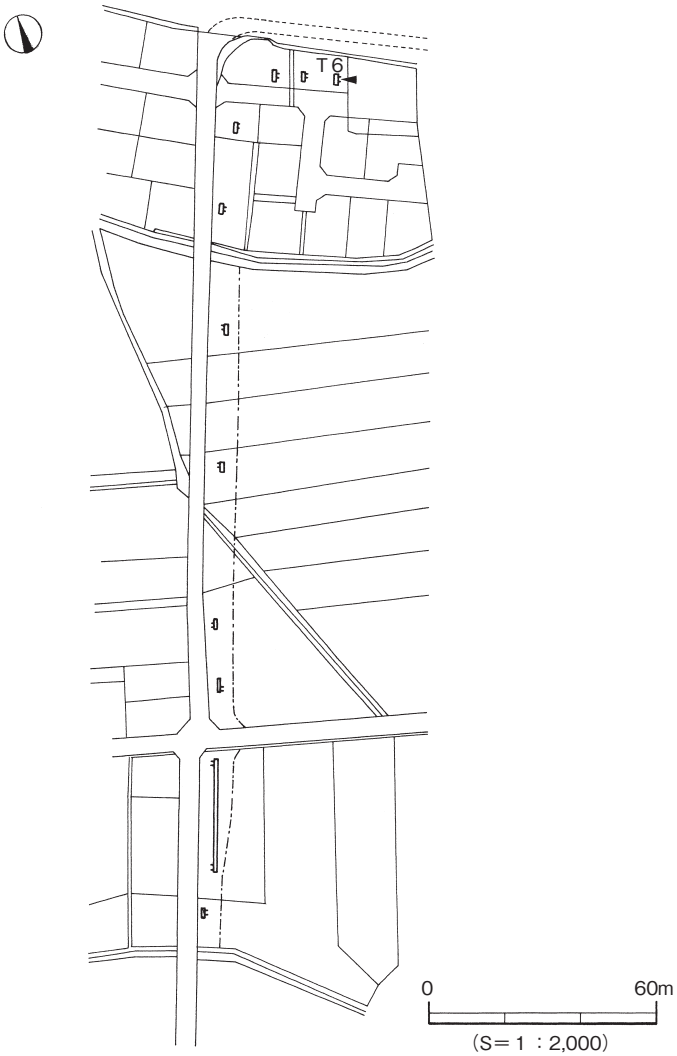

T5
0
60m
(S＝1：2,000)

1．Ｔ５調査前風景
（南より）

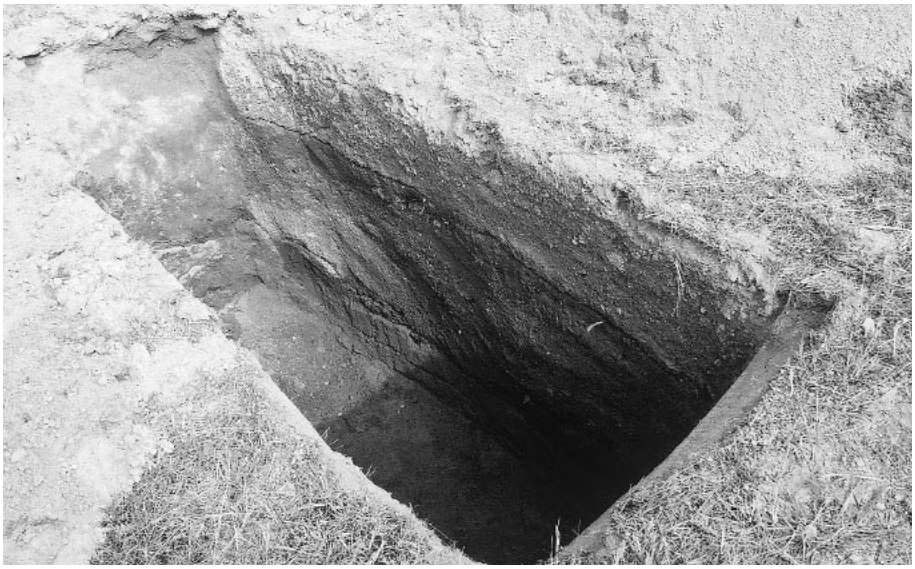
2．Ｔ５掘削風景
（北より）



3．Ｔ５土層堆積状況
（東より）

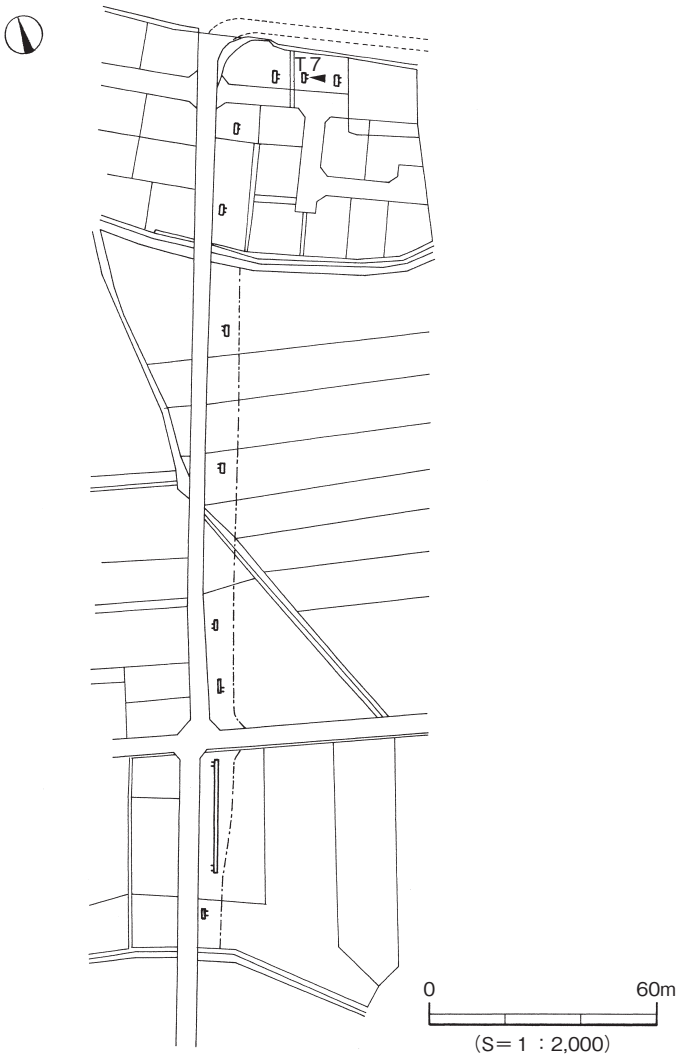

T6
0
60m
(S＝1：2,000)

1．Ｔ６調査前風景
（南西より）

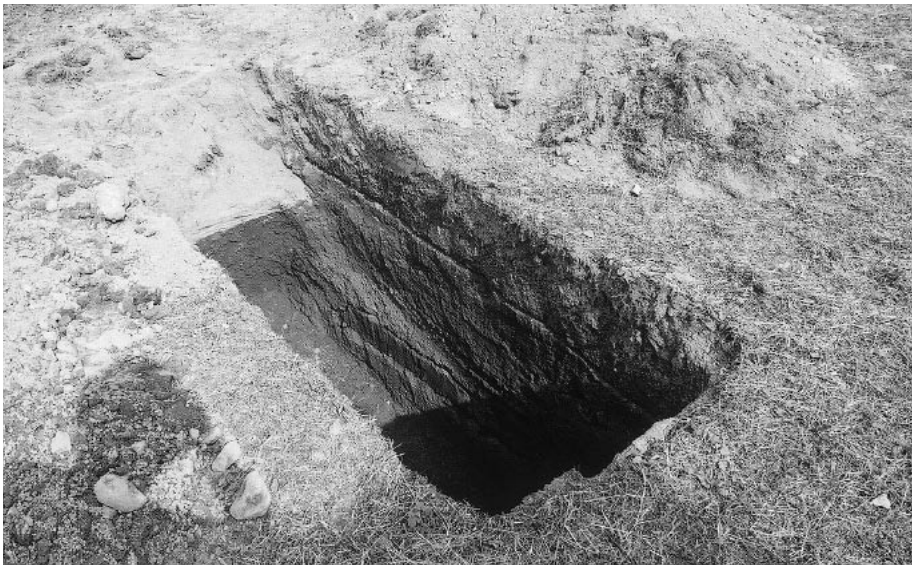


2．Ｔ６土層堆積状況(1)
（南西より）

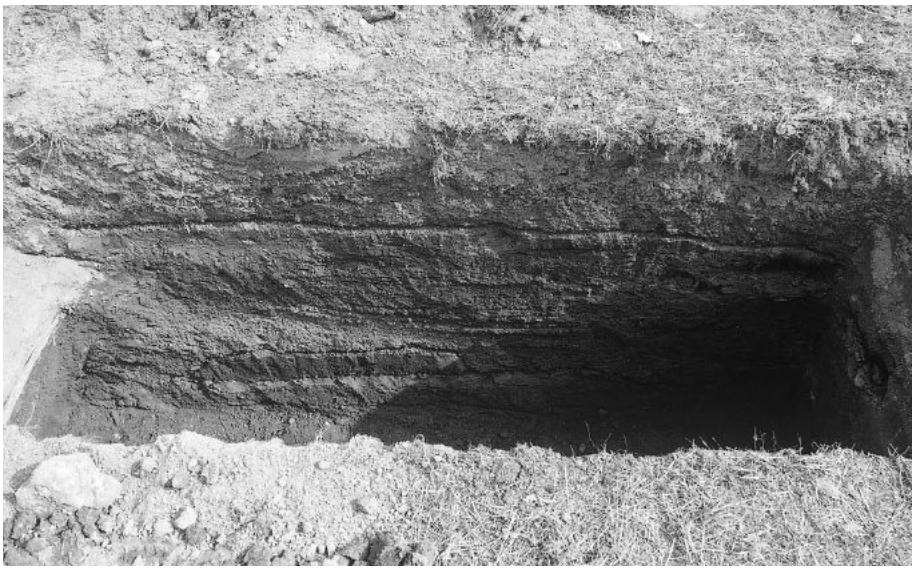
3．Ｔ６土層堆積状況(2)
（西より）


T7
0
60m
(S＝1：2,000)

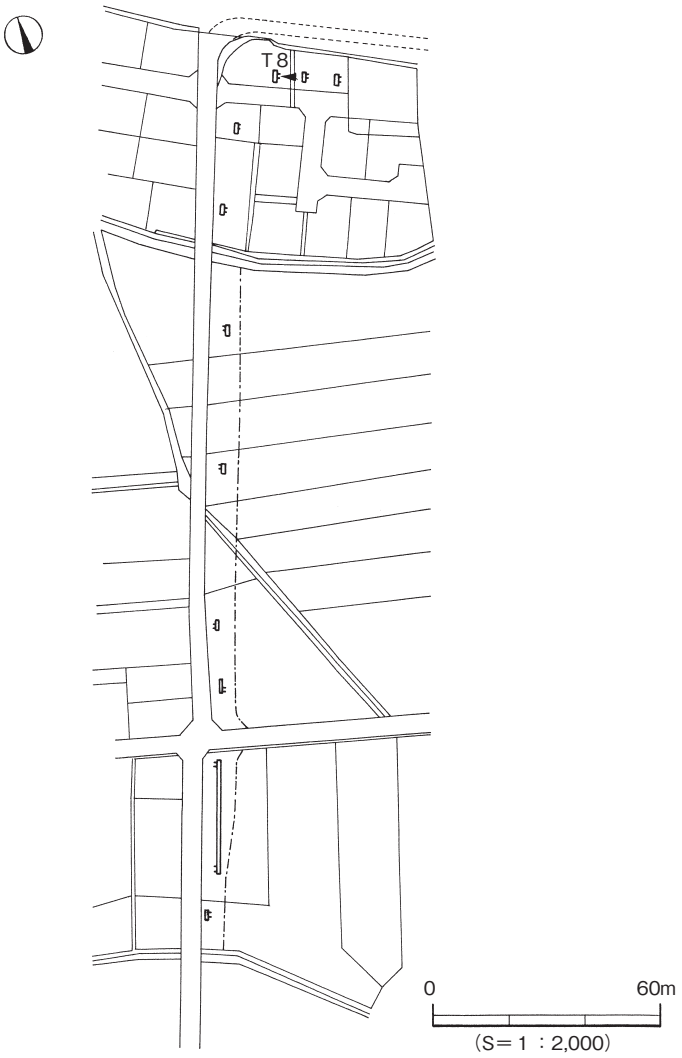
1．Ｔ７掘削風景
（南西より）



2．Ｔ７土層堆積状況(1)
（南西より）



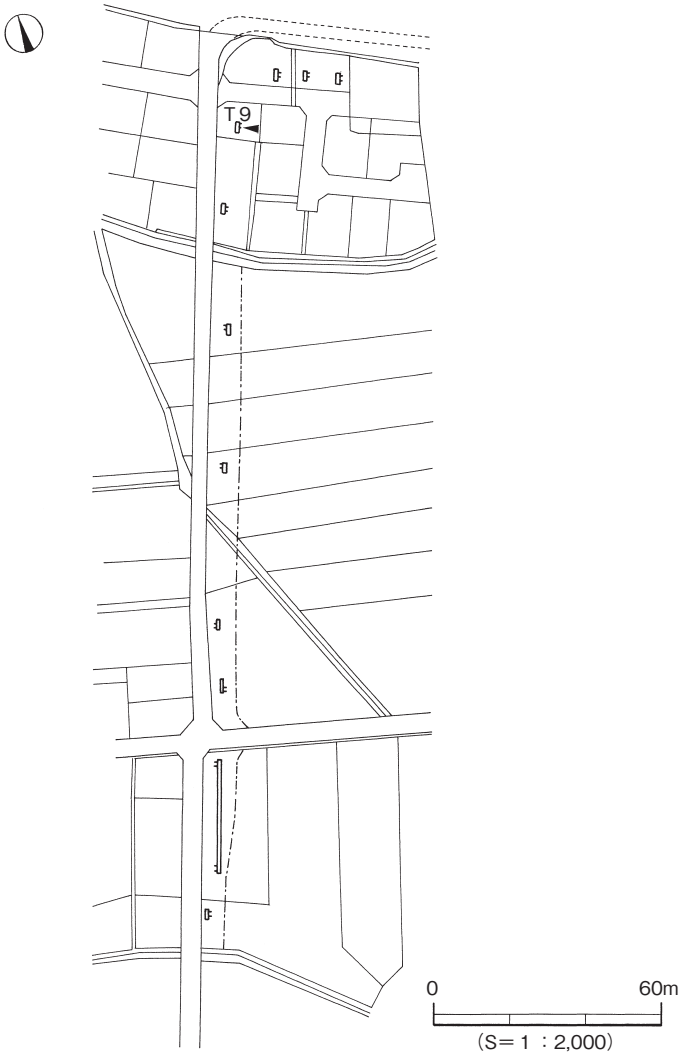
3．Ｔ７土層堆積状況(2)
（西より）


T8
0
60m
(S＝1：2,000)

1．Ｔ８調査風景
（南東より）

2．Ｔ８土層堆積状況(1)
（南西より）

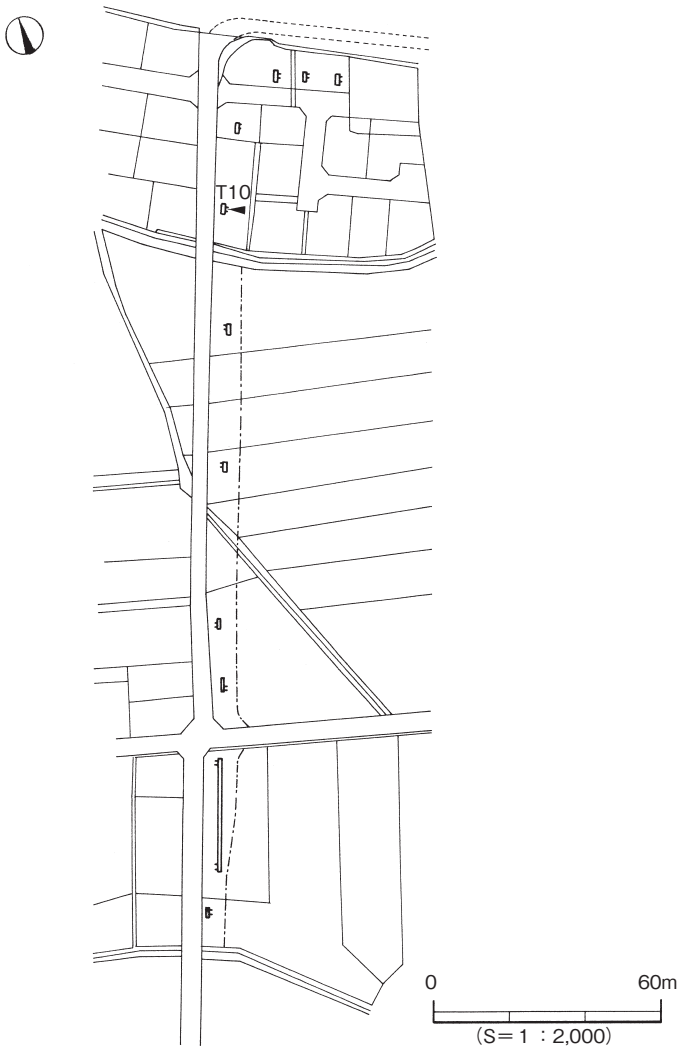
3．Ｔ８土層堆積状況(2)
（西より）


T9
0
60m
(S＝1：2,000)

1．Ｔ９調査前風景
（北西より）

2．Ｔ９土層堆積状況(1)
（北西より）

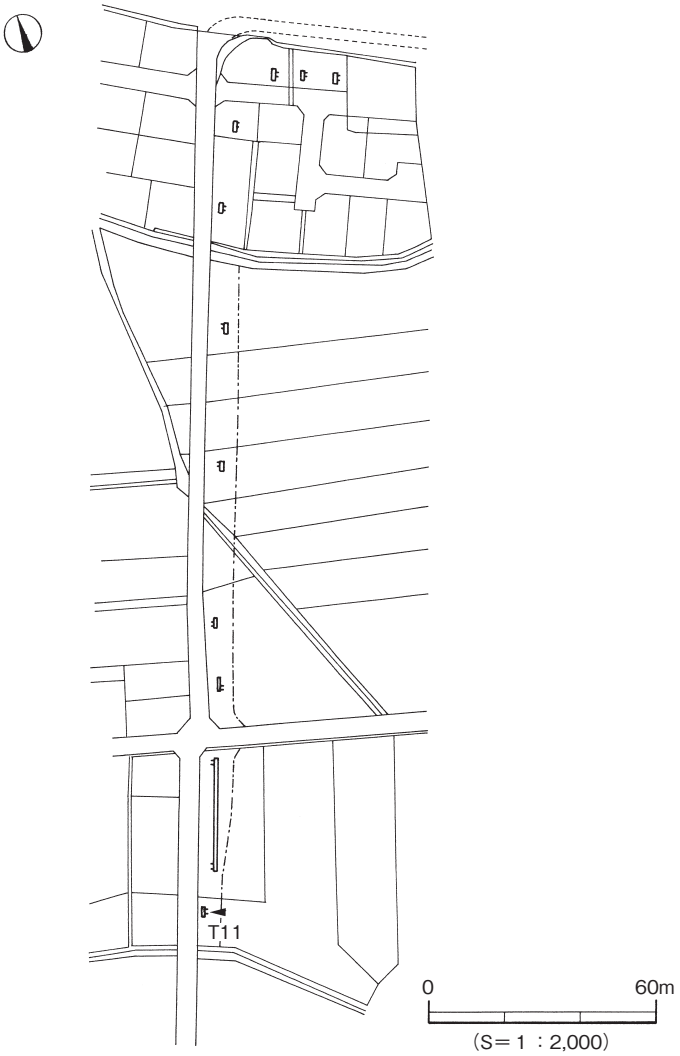
3．Ｔ９土層堆積状況(2)
（西より）


T10
0
60m
(S＝1：2,000)

1．T10掘削風景
（北西より）

2．T10土層堆積状況(1)
（南西より）

3．T10土層堆積状況(2)
（西より）


T11
0
60m
(S＝1：2,000)

1．T11調査前風景
（北西より）

2．T11土層堆積状況(1)
（北西より）

3．T11土層堆積状況(2)
（西より）

図版12

1．調査前風景（北より）

2．１区掘削風景（北より）

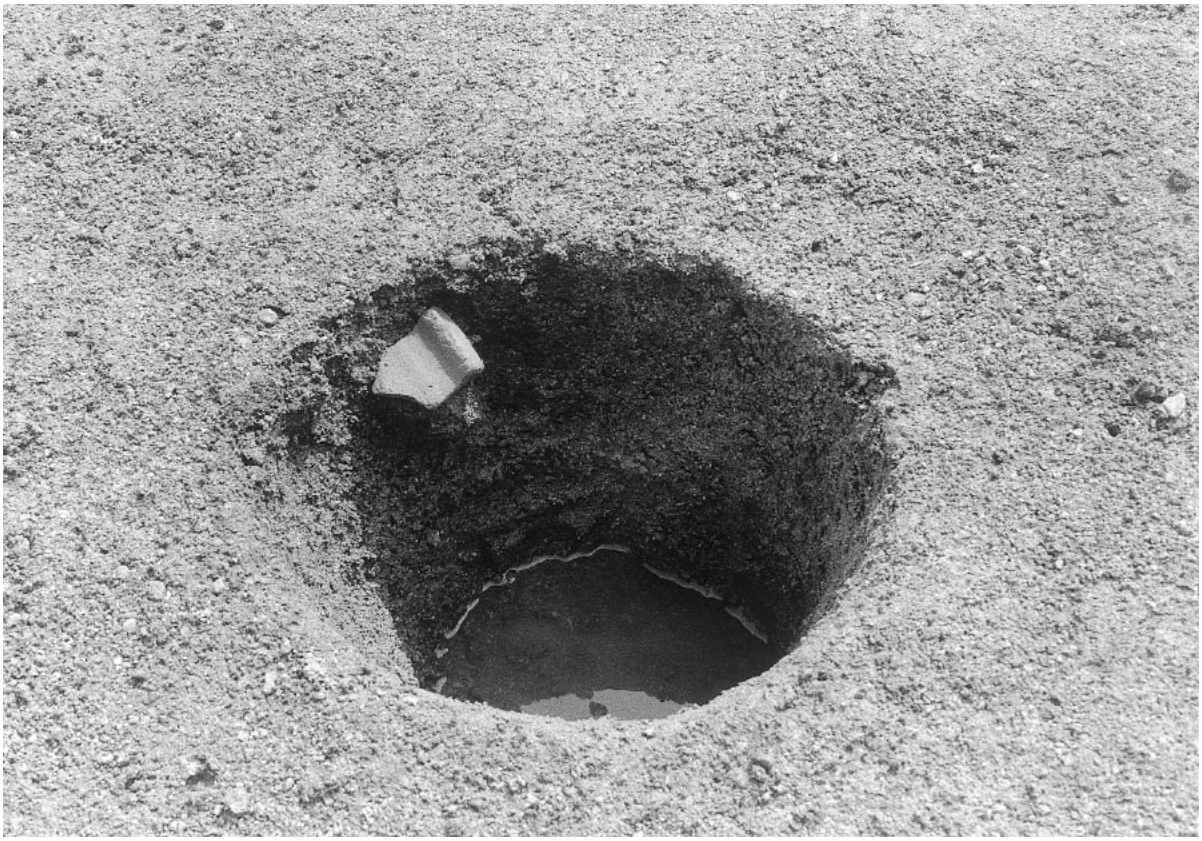
1．１区遺構検出状況（北より）

2．１区遺構検出状況（西より）

図版14

1．ＳＫ１土層堆積状況（西より）

2．ＳＫ１完掘状況（南より）

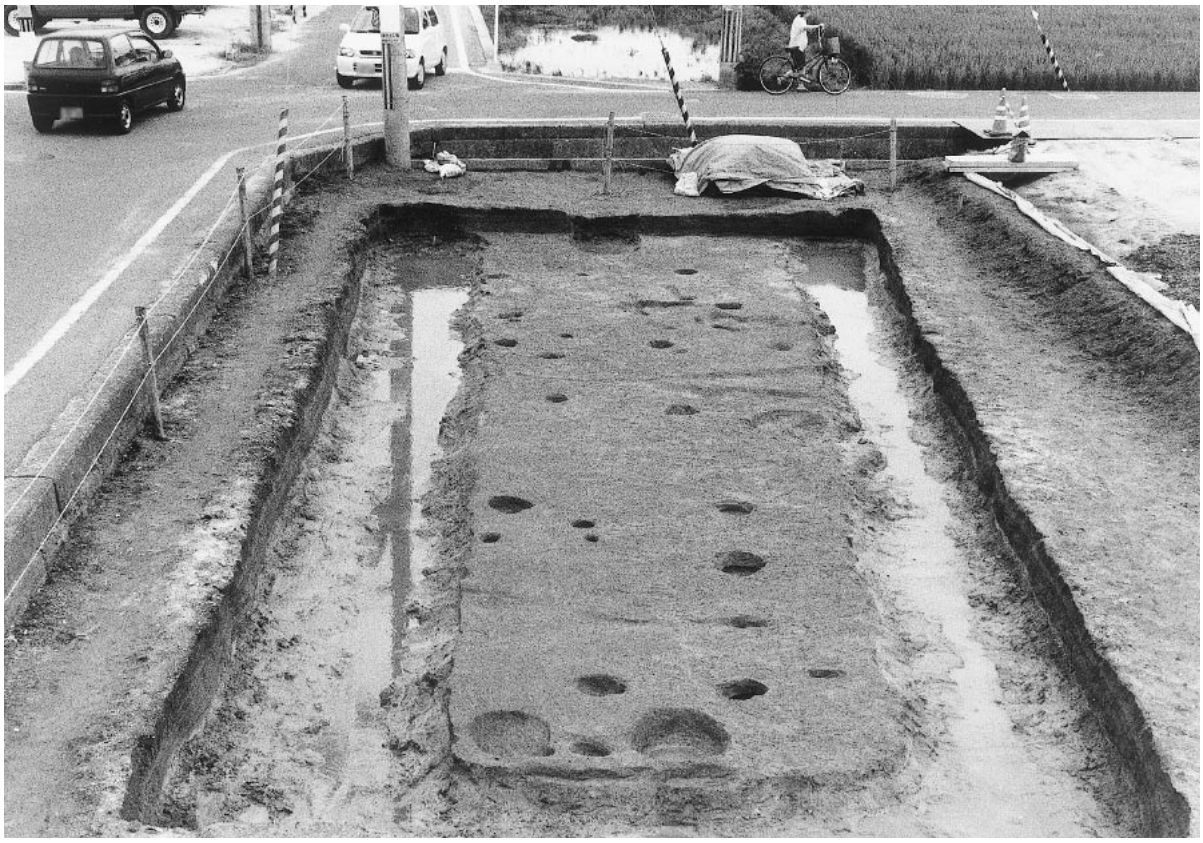


1．ＳＰ７遺物出土状況（北より）

2．１区作業風景（南より）

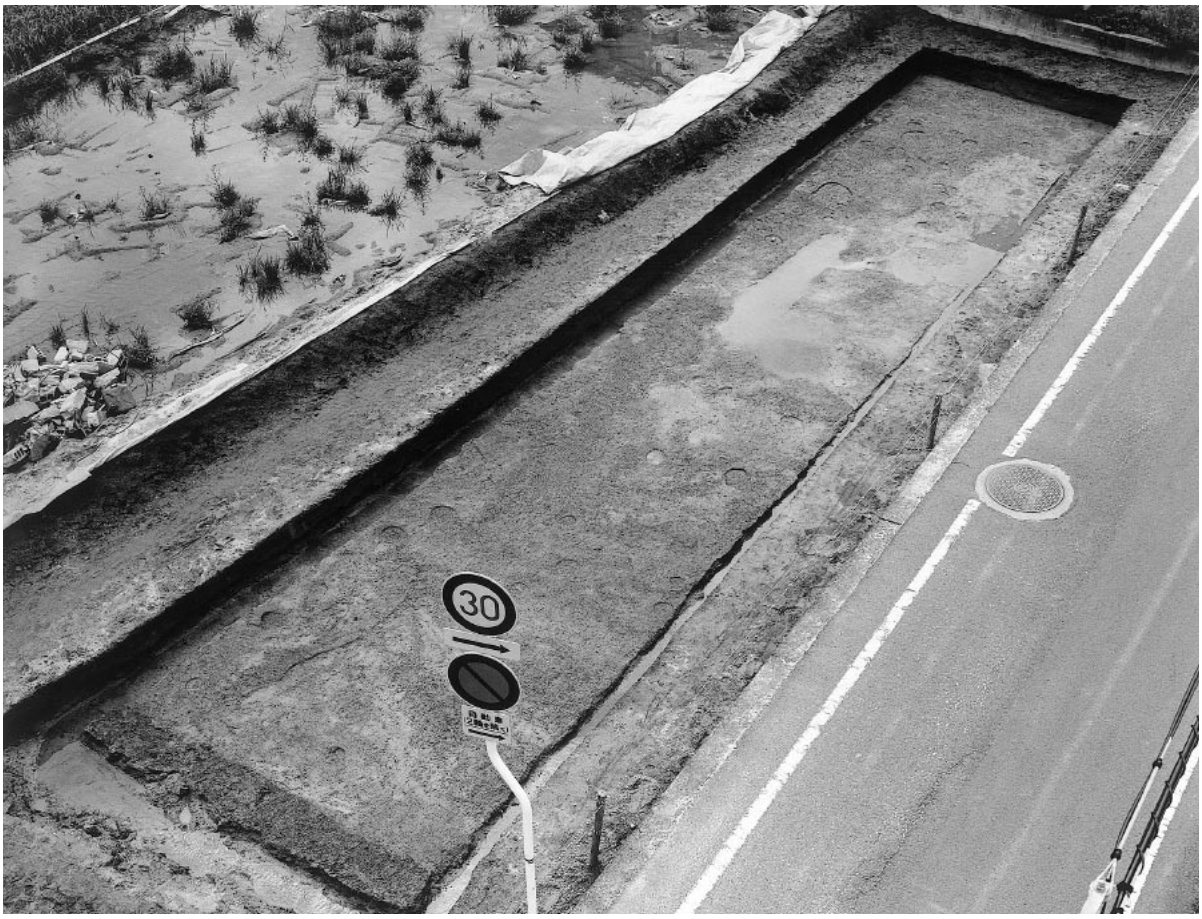
図版16

1．１区完掘状況（北より）



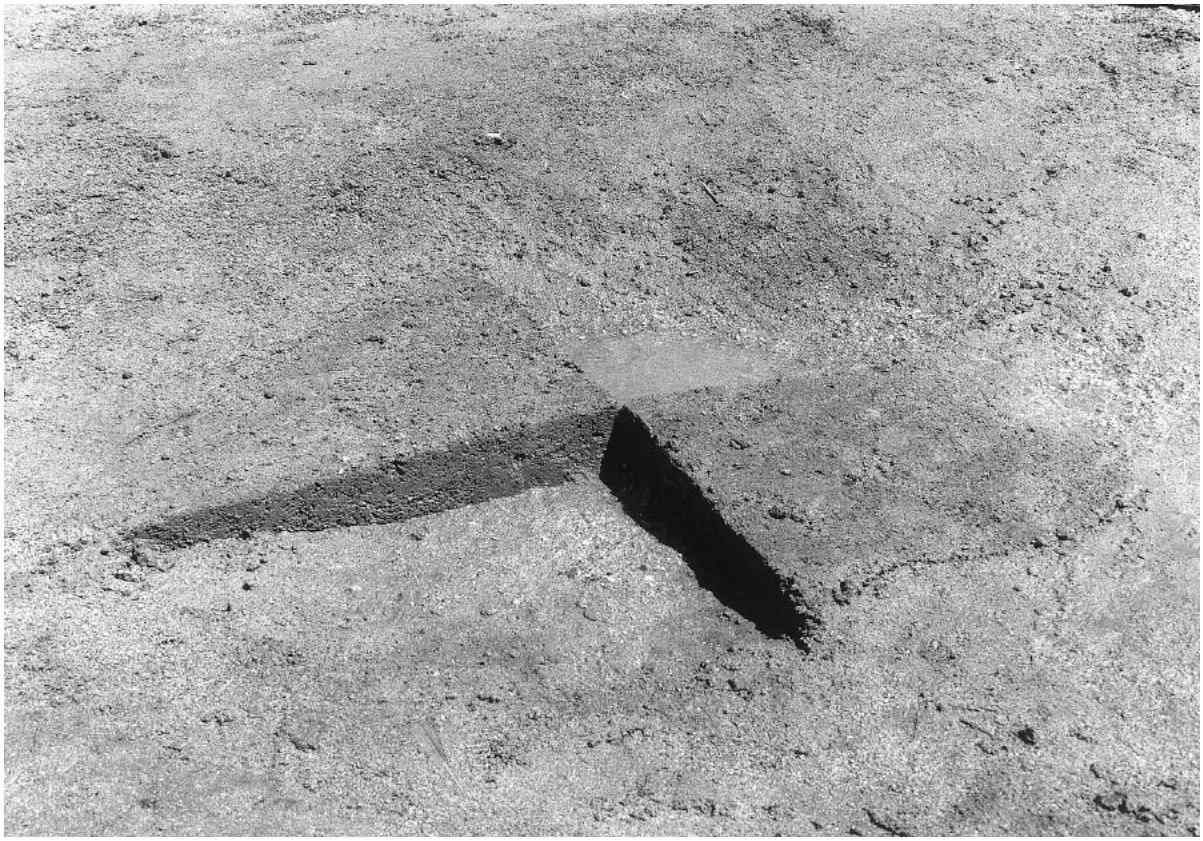
2．１区完掘状況（南より）

１．２区掘削風景（南より）



２．２区遺構検出状況（北西より）

図版 18



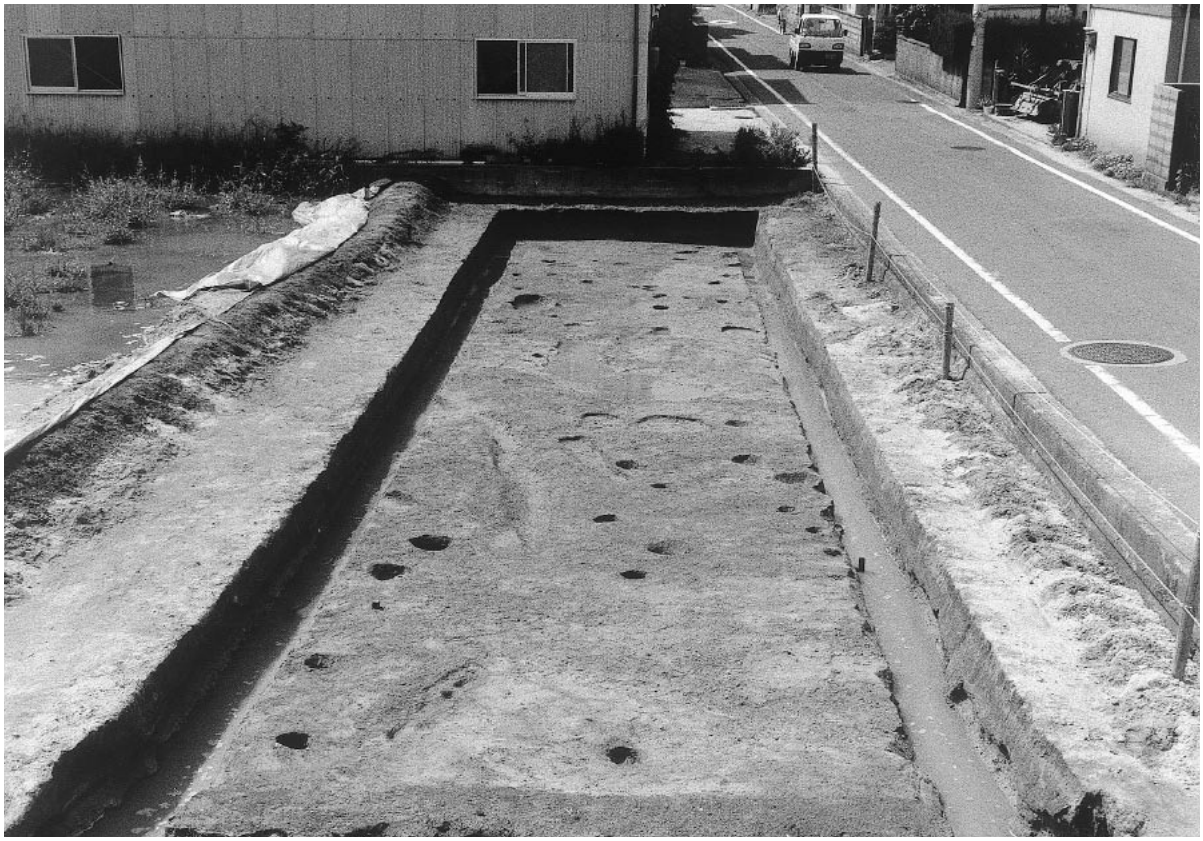
１．ＳＫ５土層堆積状況（南より）

２．ＳＫ５完掘状況（南より）

１．ＳＰ72遺物出土状況（北より）

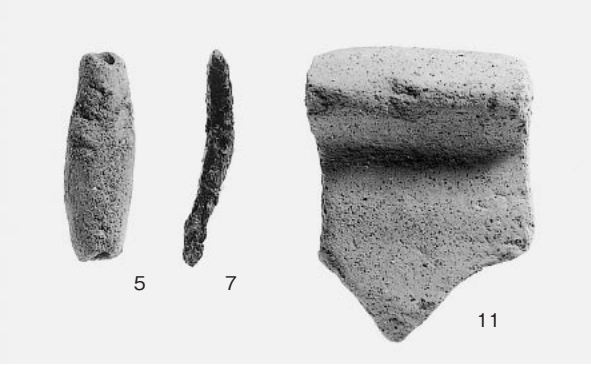
２．２区作業風景（北西より）

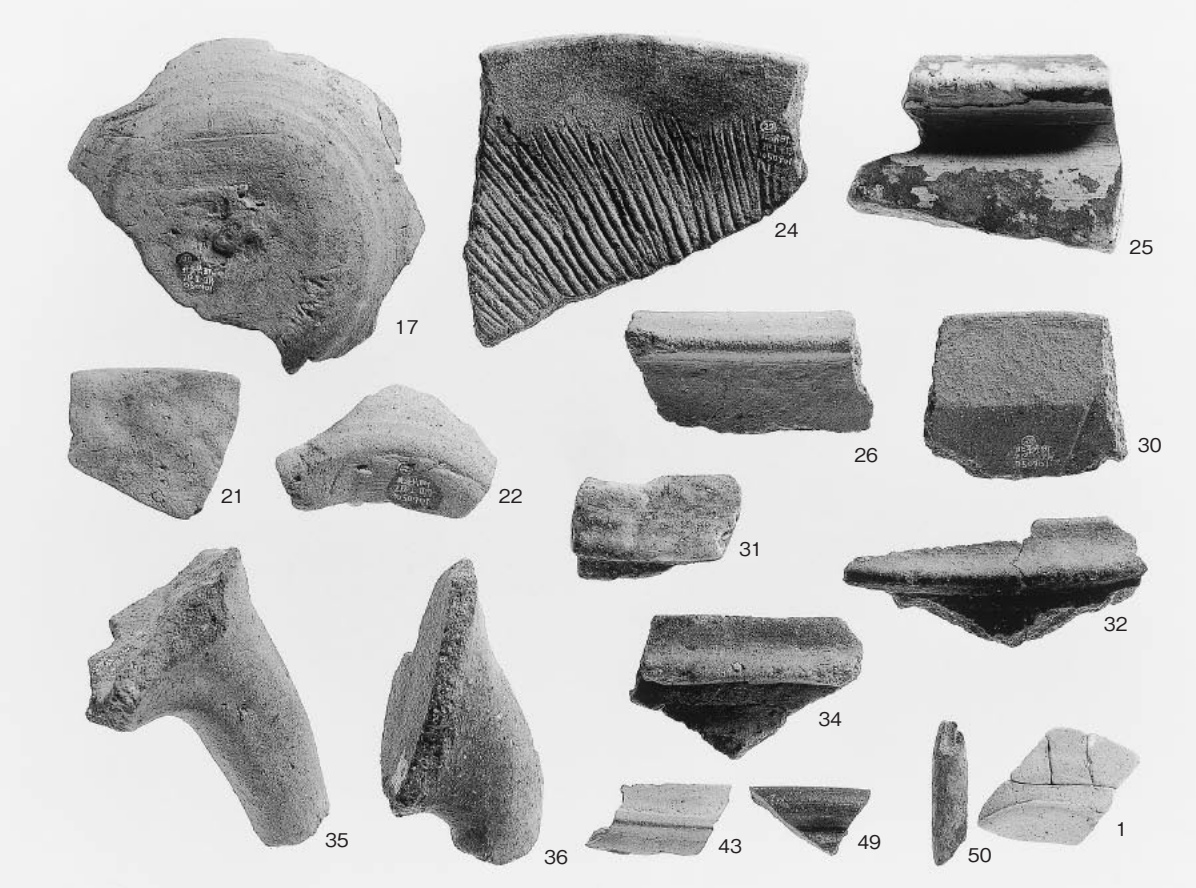
図版 20



１．２区完掘状況（北より）

２．２区完掘状況（南より）





1．ＳＫ３出土遺物(5)、ＳＫ５出土遺物(7)、ＳＰ７出土遺物(11)、ＳＰ72出土遺物(8)、西壁トレンチ出土遺物(57)、第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物（17・21・22・24～26・30～32・34～36・43・49・50)、試掘トレンチ出土遺物(1)

報告書抄録

ふりがな	ほうじょうかたまちいせき
書名	北条片町遺跡
副書名	市道北条鴻之坂線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第122集
編著者名	山之内志郎
編集機関	松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790-0003　松山市三番町６丁目６番地１　TEL(089)948-6605 市埋文：〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６　TEL(089)923-6363
発行年月日	西暦2008年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうじょうかたまちいせき 北条片町遺跡	えひめけんまつやましほうじょう 愛媛県松山市北条	38201		33° 58′ 39″	132° 46′ 46″	20050801～ 20050930	318	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北条片町遺跡	集落	中世	土坑、溝	土師器、土錘、砥石	

要約	北条平野に立地する中世の集落。遺構は多数の柱穴を検出したが具体的な建物配置などは不明である。遺物は土錘などが出土し、この地で生活した人々の生業の実態を知る手がかりとなるものである。

松山市文化財調査報告書 第122集
市道北条鴻之坂線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

北条片町遺跡

平成20年３月31日　発行

編・集
発　行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町６丁目６番地１
ＴＥＬ（089）948-6605

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６
ＴＥＬ（089）923-6363

印　刷　セキ株式会社
〒790-8686　松山市湊町７丁目７番地１
ＴＥＬ（089）945-0111